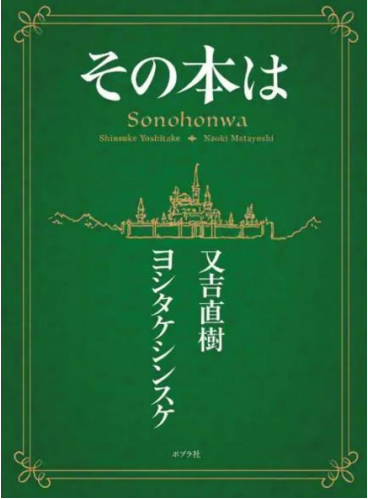


～私が薦めるこの一冊～

※同名の図書が複数の出版社から出されている場合があります。ここに掲載した出版社名は推薦者が
読んだ本によるものです。

令和6年度に書かれた推薦文

	『その本は』 又吉直樹・ヨシタケシンスケ／著 ポプラ社 「その本は」…ある国の本好きの王様の命を受けて、ある二人が、世界中の「めずらしい本」についての話を聞くため、旅に出るところからはじまります。 一年後、旅から戻ってきた二人は、いろいろな人から聞いた、いろいろな本の話、王様に、一晩ずつ、かわりばんこに、十三夜かけて話します。 私は、十三夜にわたる物語を読みながら、「ほっこり」したり、「くすっ」と笑ってしまったり、ちょっと怖かったり、しみりしたり…様々に、こころを動かされました。 そして、最後まで読み終えたとき、本(物語)を「読む」ことは、「こころで旅をする」こと、「誰かのこころに出逢いにいく」ことなのかもしれない、と思いました。 よろしかったら、皆さんも、二人に導かれて「こころの旅」に出掛けてみてはいかがでしょうか。 追伸 私のお気に入り、第五夜の56頁から59頁に書かれている、ある本の物語です。 皆さんは？
推薦者	伊藤 聡 氏(神奈川県教育委員会教育局生涯学習部生涯学習課)

	『奇跡を起こした村のはなし』 吉岡 忍／著 ちくまプリマー新書 (紙では絶版 電子書籍にて閲覧可 令和7年3月現在) 「地域を”つくる”」という話題がある。このテーマで私が指針として持ち続けている話が「奇跡を起こした村のはなし」である。 新潟県北部に位置する黒川村(現:胎内市)は、人口5000人ほどの小さな村だが、村が統合されるまでの間、人口が増加する稀有な村の1つであった。 話の中心は、昭和30年から48年に渡って村長を務めた伊藤孝二郎氏。農業の近代化、道路の整備、総合開発などの「地域開発」が行われたのである。 水温が低くて稲が育たない水田でコメをたくさん取るためには。豪雪・豪雨災害で傷ついた村が再建できるように。雪で閉ざされる山奥の村から出稼ぎをしなくてもよいようにするには… 地域を残すために、熱い思いを持ち、実現するために走り回った村の様子が丁寧な取材で書かれている。 中でも印象的なのは「産業が必要だ」と職員を海外に派遣してビール、ソーセージの技術を学び、村の中で産業を興していく様子。その成果は、令和の現在も胎内市の特産品の1つとして受け継がれている。 学校で学んだことが「教育」ではなく、必要に応じて「学び直し」、行動として「形」にする姿は生涯学習、地域づくりと切っても切れない話である。
推薦者	佐野 誠 氏(神奈川県教育委員会教育局生涯学習部生涯学習課)

	『浜村渚の計算ノート』 青柳 碧人／著 講談社文庫 『数学をはじめとした理系の科目を学校教育から外す』 文部科学省が、少年犯罪対策の名の元に学校教育から数学を排除した世界。政府の政策の撤廃を求めて、天才数学者・高木源一郎を中心としたテロリスト集団『黒い三角定規』によるテロ活動が多発する。 数学を愛する個性豊かなテロリスト達が起こす事件は、数学者や定理などへの愛にあふれた事件ばかり。そのため、解決するには、数学の知識が必要となる。 テロ対策の最終兵器として白羽の矢が立ったのは、中学2年生の少女・浜村渚。とろんとした二重まぶたに、不安げな長いまつげの持ち主で、まだあどけなく子どもっぽさのこる。数学以外(特に社会)は苦手な普通の女子中学生。人見知りで、初めての場合自分から話そうとしない。 しかし、数学のこととなると饒舌となり止まらなくなる。あらゆる数学者に「〇〇さん」をつけ、唯一オイラーだけは「オイラー先生」と呼ぶほどの愛情をもっている。 愛用の『さくらんぼノート』と親友からもらったピンクの勝負シャープペンを使い、難事件を鮮やかに解決していく。 そんな渚と一緒に事件を解決していくと、自然と「数学って面白い」と思えてくる。数学愛溢れる物語である。
推薦者	小林 正幸 氏(神奈川県教育委員会教育局湘南三浦教育事務所)

	『エルマーのぼうけん』 ルース・スタイルス・ガネット／著 ルース・クリスマン・ガネット／絵 わたなべ しげお／訳 福音館書店 1948年にアメリカで出版された児童文学作品です。1968年に人形劇として放映され、1997年には「エルマーの冒険」として日本でアニメーション映画化されました。主人公のエルマーがリゅうの子どもを助ける冒険の旅を描いた本です。私自身、物語と初めて出会った本が「エルマーのぼうけん」です。保育園に通園時に読み聞かせ頂いたのを覚えています。 ユニークな登場人物であったり、様々なトラブルが起こるたびに解決していく様子であったり、エルマーの機転が利く行動など、幼いながらも大変ドキドキ・ワクワクしながら話を聞いていたのを思い出します。子どもたちにも読んで聞かせてあげたいと思わせてくれる一冊だと思います。 出発する前にリュックに詰めた輪ゴム1箱、チューインガム、歯ブラシ、チューブ入り歯磨き粉…などを駆使して様々な困難をどう乗り越えていくのかお楽しみに！
推薦者	吉田 起郎 氏(神奈川県教育委員会教育局中教育事務所)

	『100万回生きたねこ』 佐野 洋子／作・絵 講談社 この絵本を読むと小学校の時の先生に何度も言われた「形あるものは壊れる。命あるものは死ぬ。」という言葉が思い出されます。 その時は、「そんなの当たり前じゃん。」くらいしか考えていませんでしたが、今、この絵本を読んで、先生の言いたかったことが分かったような気がしました。 100万回も死んで、100万回も生きた立派なねこがいました。色々な人に飼われますが、だれのことにも好きにならず、死ぬことも平気なねこでした。 「おれは、100万回も死んだんだぜ！」 だれよりも自分のことが好きだったねこですが、1匹の白いねこに出会い……。その一生を最後に、ねこは、もう、けっして生きかえりませんでした。 どうして、ねこは生きかえらなかったのでしょうか。 100万回生きることよりも価値あることとは何か。最後、一度も泣いたことがなかったねこが大きな口を開けて100万回泣く姿に生きる希望を感じられる一冊です。
推薦者	山崎 良徳 氏(神奈川県教育委員会教育局県西教育事務所)

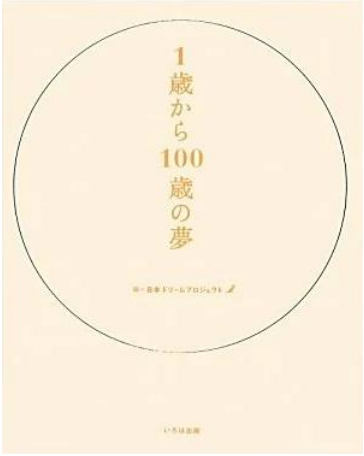
	『どんなに きみが好きだか あててごらん』 サム・マクブラットニィ／作 アニタ・ジェラーム／絵 小川 仁央／訳 評論社
	子どもの頃から本を読むことが得意でなかった私は、せめて自分が親になったときには我が子が本を好きな子になるように、たくさん読み聞かせをしようと決めていました。そこで最初に選んだ本がこちらになります。 タイトルのとおり、内容はとてもシンプル。物語はチビウサギさんとデカウサギさんが登場して、お互いがどれだけ相手のことを好きか伝え合うものです。物語の最後、寝ているチビウサギさんにデカウサギさんがそっと語りかける言葉に、チビウサギさんに対するたっぷりの愛情が感じられ、心がほくほくします。この本を読む度に、にこにこしながら聞いている我が子を見て、ついつい気持ちが入ってしまいました。 優しさや愛おしさを感じる2匹のウサギさんの絵も、お薦めポイントの一つです。いろいろな国で翻訳され、たくさんの人たちに親しまれているこの一冊を、ぜひ手に取って読んでみてはいかがでしょうか。
推薦者	宮川 由大 氏(神奈川県教育委員会教育局県西教育事務所)

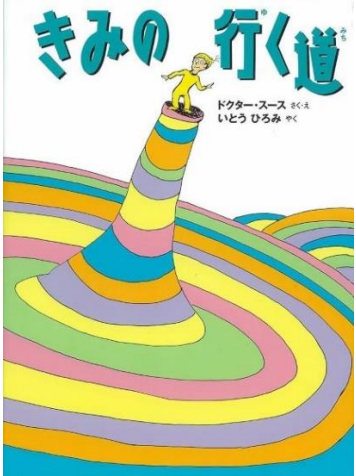
	『バムとケロのにちようび』 島田 ゆか／作・絵 文溪堂
	「バムとケロが いっしょなら、たいくつな にちようびも たのしいこと ばかり！」 しっかり者のバムと天真爛漫のケロちゃんが織りなすクスツと笑えて心がほっこりするストーリー、「バムとケロ」シリーズの1作目がこの本です。 サッカーも砂遊びもできない退屈な雨の日。バムはケロちゃんがよごした部屋をきれいにきれいに片付けて、本を読もうとします。そこに、どろんこ、びちゃびちゃのケロちゃんが帰って来て…。さあ、このあとどうなるかはぜひ読んでみてください！ 「バムとケロ」との出会いは、小学校での読み聞かせでした。チャームなふたりのやりとり、ページをめくるとに何が起こるのかワクワクするテンポのよい展開、そして色彩豊かでかわいらしい絵に、子どもたちだけでなく、すっかり私も引き込まれてしまいました。 「バムとケロ」シリーズは、この本を含め5冊あります。ふたり以外にも小さな友達や小物がたくさん登場し、そこに注目して読むとまた違った楽しみ方ができます。そして、シリーズでつながっているところもあり、新たな発見の数々に飽きることはありません。 読み聞かせもよし、一人でじっくり味わうもよし。「バムとケロ」の世界に浸ってみませんか。
推薦者	中村 貴之 氏(神奈川県教育委員会教育局県西教育事務所)

令和5年度に書かれた推薦文

	『ズッコケ三人組シリーズ「うわさのズッコケ株式会社」』 那須 正幹／著 前川 かずお／絵 ポプラ社文庫
	「ズッコケ三人組」とは、短気でおっちょこちょいのハチベエ、物知りだけど理屈っぽいハカセ、行動がゆったりで気持ちがやさしいモーちゃんの男の子三人組のことです。このシリーズは、毎回3人の「ズッコケ」により、失敗をしてしまいますが、3人の個性を生かして、協力しながら問題を乗り越えていく、心温まる物語です。 特にこのシリーズの一押しは、「うわさのズッコケ株式会社」。 釣り客で賑わう港で弁当やジュースを売れば商売になると思った3人が、株式会社を立ち上げ、クラスの友人から出資金を集め、事業を拡大していきます。釣りシーズンが終わり、売り上げが落ち込んでいく問題を3人の知恵を絞って乗り切っていきます。驚きの結末にも注目です。 作品の中の「株主総会」「資本金」「利益」といった大人の世界の言葉にわくわくしながら、夢中で読んだ記憶がよみがえります。いろいろな世代に読んでほしい一冊です。金融教育のきっかけづくりにもお薦めです。
推薦者	多々納 真治 氏(神奈川県教育委員会教育局生涯学習課)

	『兎の眼』 灰谷 健次郎／著 近藤 勝也／カバーイラスト YUME／本文イラスト 角川つばさ文庫
	この本を読んだのは今から20年以上前、私が小学校の先生を目指していた大学生の頃です。自宅の本棚にあったこの本を何気なく手に取りました。誰かに勧められたわけではなく、また学習のためでもなく、本当に何気なく手に取り、そして、一気に読んだことを覚えています。先生を目指したきっかけではありませんが、それから私の理想の先生像は、「小谷先生」であり、「足立先生」です。以来、時々この本を手に取り、読むことができました。 先日、ふと立ち寄った書店で装丁が新しくなった『兎の眼』を見つけ、久しぶりに読みたいと思い購入しました。何年かぶりに読み返しても、やはり涙が出てきました。悲しい涙ではありません。登場人物の真っ直ぐな気持ちに触れた時に溢れる感動の涙です。 初版は40年以上前であるため、言葉の描写や時代背景を想像するのが難しいかもしれませんが、気持ちが動かされるのを感じる作品であることは間違いありません。児童文学ですが、大人にこそ読んでほしい一冊です。
推薦者	林田 敬士 氏(神奈川県立図書館)

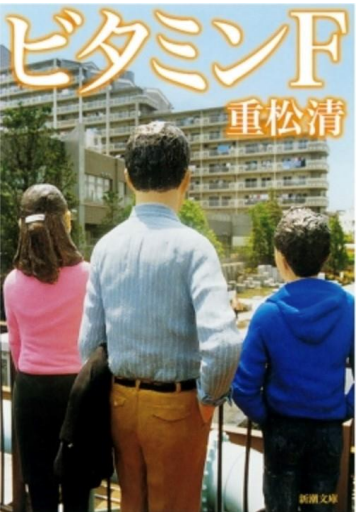
	『1歳から100歳の夢』 日本ドリームプロジェクト／編 いろは出版
	今、夢を持っていますか。この本は、1歳から100歳までの方の夢がまとめられています。夢には様々なものがあります。なかなか形にならない夢、希望に満ち溢れた大きな夢、挑戦したい夢、誰かを支えたいという夢、生きる楽しみを描く夢など。夢は年齢や環境を問わず、志や思い次第で抱くことができる素敵なものです。その夢々の共通していることは、どの夢もキラキラしていて今を生きる原動力になっているということです。 この本は年齢順に夢が載せられており、夢の他にその方の写真やライフサイクルも載っています。ぜひ、自分の人生と比べて読んでいただきたい内容になっています。過去を振り返りながら、また今と比べながら、さらに未来を想像しながら読むと、より一層胸に込み上げてくるものがあります。 夢はいくつになっても持っていたいとそうに感じさせてくれるおすすめの一冊です。
推薦者	首藤 明 氏(神奈川県教育委員会教育局湘南三浦教育事務所)

	『きみの行く道』 ドクター・スース／著 伊藤 比呂美／訳 河出書房新社
	新しい一歩を踏み出す全ての人に！ 進学する人、就職する人、転職する人など子どもから大人まで新しい一歩を踏み出す全ての人に贈りたい1冊です。 人生は、自分の足で行きたい方向を選んでいける。しかし明るい未来だけではなく、人生には、うまくいかないことや嫌になることもある。けれど、最後には成功する。 卒業を控えた小学生に読み聞かせをしたり、新しい道へ進む友達へプレゼントしたり、また、一歩踏み出したい自分のために手に取ったり… 読む年齢やタイミングによって、感じ方や捉え方も変わってくるので、人生の節目で何度でも読める本となっています。
推薦者	小原 瑠美 氏(神奈川県教育委員会教育局県央教育事務所)

	『わすれられない おくりもの』 スーザン・バーレイ／著 小川 仁央／訳 評論社 この本が好きで子どもの時に親によく読んでもらいました。大人になって、図書館でたまたま見つけて読み返したときに、子どもの時に読んで感じたことが違うことに気づきました。読むタイミングや年齢などによって本から受け取るものが違うことに気づき、本の持つ豊かさに気づかせてくれた本です。 この本は、アナグマが主人公で「身近な人を失った悲しみを、どう乗り越えていくのか」ということをテーマにした絵本です。 賢く、いつもみんなに頼りにされているアナグマですが、冬が来る前に手紙を残して死んでしまいます。悲しみにくれる森の動物たちは、それぞれがアナグマとの思い出を語り合ううちに、彼が宝物となるような知恵や工夫を残してくれたことに気付きます。春が来る頃には、アナグマのことは楽しい思い出へと変わっていきます。 子どもの時には、森の動物たちの気持ちになり別れの乗り越え方を考えていましたが、大人になってから読んだときには、アナグマの気持ちになり子どもたちに何を伝え、何を残すのかを考えていました。形に残らないものの豊かさや大切さに気づかせてくれる本です。
推薦者	深野 唯 氏（神奈川県教育委員会教育局県西教育事務所）

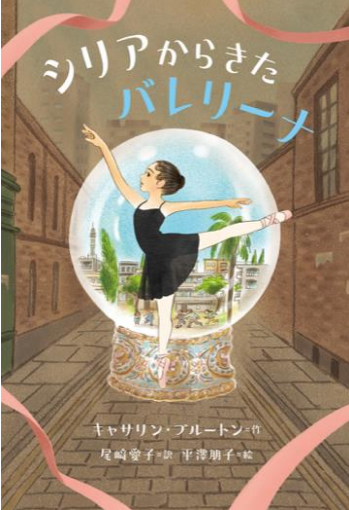
令和4年度に書かれた推薦文

	『ノンちゃん 雲に乗る』 石井 桃子／著 中川 宗弥／画 福音館書店 ノンちゃんは、小学校2年生の女の子。ノンちゃんはある日、ひよんなことから雲の上で不思議なおじいさんと出会います。聞き上手なおじいさんに、ノンちゃんは、家族のこと、飼っている犬のこと、学校での成績のことなど、たくさんのお話をします。でも、ノンちゃんは、自分が「正しい」と思って話していることに、おじいさんが違う意見を言うので、「なぜだろう？」と考えます。そして、大切なことに気づくのです。「立場の違いを理解しあい、相手のことを思いやることの大切さ」を。そして、おとうさん、おかあさん、“意地の悪い”（と思っていた）おにちゃんにたまらなく会いたくなるのです。 家族って、お友達って、飼い犬や自然に生きるものたちって、なんて、「いとおいしい」のでしょう。本当に大切なものは何かを思い出させてくれる1冊です。 この本は、昔々、父からもらった誕生日プレゼント。 いまでもそっと本棚に立てかけてあります。
推薦者	吉田 美和子 氏（神奈川県教育委員会教育局生涯学習部）

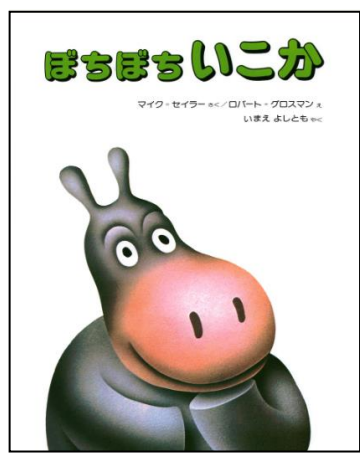
	『ビタミンF』 重松 清／著 新潮文庫 大人になる前って何を考えてどんな気持ちでいたのかなんてもう忘れてしまったけれど、この作品を改めて読み返してそういえばこんなふう感じていたのかもと思ったり、そうだったかしらと思ったり。子どもゴコロは分からなくて、大人になった今、それはそれで仕方ないのだけれど、描写からそうした多感な心の中と親の思いがしっかり伝わってくる短編集です。 数ある重松作品の中でもこの作品をお薦めするのは、家族にまつわるいつもの風景や会話の中にある親と子どもの両者の感情を、主に親目線のみで描いているから。 親としてほっこりするはなし、心がざわざわするはなし、ハッとさせられるはなしなど、理解しているつもりでも子どもゴコロはそう簡単ではないのです。それと同時に、親は普段どんなことを考えているのか知ることでもあるかもしれません。そういった意味でも、子どもゴコロを理解する若い皆さんにぜひとも読んでもらいたい一冊です。
推薦者	信太 雄一郎 氏(神奈川県教育委員会教育局生涯学習部生涯学習課)

	『項羽と劉邦』 司馬 遼太郎／著 新潮文庫 私が高校生の頃に読んだ、紀元前の中国、秦王朝の滅亡から漢王朝の成立までの史実を基にした歴史小説です。 秦の始皇帝は群雄割拠の戦国時代を終わらせ、中国史上初の統一国家を築きます。しかし、民衆は重税と労役に耐えられず、始皇帝が亡くなると次々と反乱が起きて再び戦乱の世となり、その中に二人の男が現れます。 一人は名門の出身で、圧倒的な武勇の持ち主の若き「項羽」 もう一人は、農家に生まれ働きもせず行いも悪いが、不思議と人に慕われる中年男の「劉邦」 項羽と劉邦の二人が、秦を滅ぼした後の天下の覇権をかけて争います。 中国の歴史を描いた作品としては、若き日の秦の始皇帝や武将たちを描いた人気漫画「キングダム」や、魏・呉・蜀の三国の興亡を描いた「三国志」が有名ですが、「項羽と劉邦」は時代的に、その2つの作品の間に位置します。 壮大なスケールの物語が好きな方に、ぜひおすすめです。
推薦者	藤原 幸雄 氏(神奈川県教育委員会教育局生涯学習部生涯学習課)

	『嫌われる勇気 自己啓発の源流「アドラー」の教え』 岸見 一郎、古賀 史健 著 ダイヤモンド社 様々なコンプレックスに悩む若者たちに読んでほしい一冊です。タイトルの「嫌われる」に目がいきがちですが、この本は対人関係に悩む人たちが一歩踏み出す「勇気」を与えてくれる本です。 様々なコンプレックスを抱える「青年」とアドラー心理学を修める「哲人」との対話で物語は進みます。「青年」が日常の様々な悩みや不安を「哲人」に投げかけ、「哲人」はアドラーの言葉などを借りながら、悩みの解決の道筋を「課題の分離」などのキーワードを用いながら示していきます。「青年」は「哲人」の言葉にしばしばヒートアップし、その問答は目の前で行われているかのような臨場感があります。 内容もタイトルに負けず刺激的です。私が好きな「哲人」の言葉をいくつか紹介します。「大切なのはなにが与えられているかではなく、与えられたものをどう使うかである」「人生の意味は、あなたが自分自身に与えるものだ」など心に残る言葉がいくつもあります。 この本には「幸せになる勇気」という続編もあります。悩める若者たち、ぜひ手に取ってね！
推薦者	奈良橋 仁 氏(神奈川県教育委員会教育局生涯学習部生涯学習課)

	『シリアからきたバレリーナ』 キャサリン・ブルートン／作 尾崎 愛子／訳 平澤 朋子／絵 偕成社 主人公は、内戦が続くシリアからの難民である11歳の少女のアーヤです。イギリスに渡る途中で、父親は行方不明となり、母親は、精神的に不安定なため、母親代わりとなって幼い弟の面倒も見ています。 ある日、コミュニティーセンターのバレエ教室で、過去の戦争により、自らも難民であった教室のミス・ヘレナ先生と出会ったところから、最終的にアーヤがロイヤル・ノーザン・バレースクールへの入学を目指してオーディションを受けるという物語です。 滞在許可がもらえずに、アーヤは絶望的な思いを感じることもあり、回想として物語の間にはさまれる、内戦の故郷の様子やイギリスまでの道中は、彼女の負った心の傷の深さを想像させます。 アーヤ一家を様々な場面で支援してくれるミス・ヘレナは、アーヤに「親切や、自分の身をかえりみず人に尽くすこと、人を受け入れることの寛大さ」の物語を説きます。それが何十年にも、何世代にもわたってくりかえされ、世界をより良くしていくものだという作者の主張に、私は強く共感しました。 また、最後のガラショーの場面で、アーヤは、自分の体験をソロのダンスで見事に表現しますが、それは、戦争で受けた深い心の傷を懸命に乗り越えて、「この世界の醜いものから美しいもの」を作り出そうと努力する一人の若い芸術家が誕生した感動的な瞬間でした。
推薦者	塩田 弘志 氏(神奈川県立図書館)

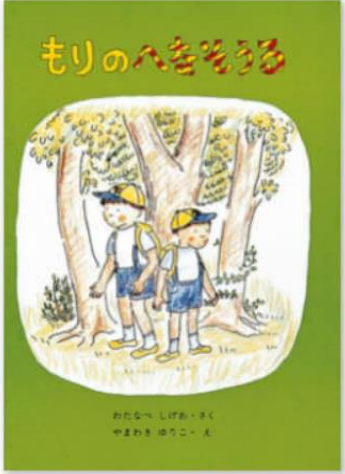
	『ずーっと ずっと だいすきだよ』 ハンス・ウィルヘルム／作・絵 久山 太市／訳 評論社 私は、犬を飼っています。かわいい、かわいい家族の一員です。 エルフィとぼくは、いっしょに大きくなった。エルフィは、せかいでいちばん素晴らしい犬。ぼくは、エルフィのおなかをまくらにするのが好きで、ぼくらはいっしょにゆめを見た。にいさんやいもうとも、エルフィが大好きだった。でも、エルフィは、ぼくの犬だったんだ。 エルフィがわるさをすると、かぞくは、すぐおこったけれど、みんなエルフィに「好き」ということはなかった。いわなくても、わかると思っていたんだ。 いつも当たり前そこにいるという奇跡、伝えられるときに気持ちを伝えることの大切さ。幼かった頃に読んでも、大人に成長した今、読んでも、涙が止まらなくなる、私がお薦めしたい一冊です。
推薦者	齊藤 愛 氏（神奈川県教育委員会教育局県央教育事務所）

	『ぼちぼちいこか』 マイク・セイラー／作 ロバート・グロスマン／絵 今江 祥智／訳 偕成社 みなさんは、どんな夢があるのでしょうか？ いろいろやりたいことがあって、一つにはなかなか決められないかもしれませんね。大人だって夢があります。夢があるって素敵ですよ。 この本に出てくるのは、ほんわかしているかばさん。やりたいことにどんどんチャレンジ！！結果は……。結果も思わず笑ってしまいます。かばさんのチャレンジしていく姿が、かわいらしくもあり気持ちの切り替えの速さに学ぶこともあり……。 この本の魅力は、それだけではありません。関西の言葉を使って訳されていて、そこにも面白さがあります。読む人も聞く人もどちらも楽しめるこの一冊。 最後のかばさんのことば「ぼちぼちいこか」には、とても深い意味があるのではないのでしょうか。一度きりの人生、せかせかせずに焦らずにじっくりゆっくり考えていくことも大切だよ。と教えられている気がします。子ども達にも「ぼちぼち」という、心には適度なゆとりが必要なんだと教えてくれるすてきな本です。
推薦者	中山 理恵 氏（神奈川県教育委員会教育局中教育事務所）

	『世界一やさしい問題解決の授業』 渡辺 健介／著 ダイヤモンド社 「困った、どうしよう？」となったとき、どのようにして解決したらよいのか悩むことはありませんか。漠然と考えていても解決に結びつかないし、解決に向かっていようで、実は解決から遠ざかっていた、なんてこともあります。この本には、題名にある“やさしい”のとおり、問題解決へ向かう基本的な手順や考え方がわかりやすく書かれています。 主人公は「問題解決キッズ」。問題解決キッズは、自分で考え、行動する経験をとおして、考え抜く力と前向きな姿勢を身に付けています。いわゆる「非認知能力」を高めているのが問題解決キッズです。この他にも、「どうせどうせ子ちゃん」「評論家くん」「気合でゴーくん」など、個性あふれるメンバーが登場します。そして、中学生バンド「キノコLovers」が様々な問題を解決して、感動のコンサートを作り上げるまでを一緒に応援しながら学ぶことができます。 この本に書かれている方法を実践すれば、自分の夢に近づけたり、現在抱えている課題が解決できたりするかもしれません。 「もっと早くこの本に出会っていたら……」と思わせてくれた本で、児童・生徒におすすめの本です。
--	---

令和3年度に書かれた推薦文

	『六千人の命のビザ』 杉原 幸子／著 大正出版 リトアニアの日本領事館の領事代理だった杉原千畝氏が、ユダヤ人救出のためのビザ等を発給し、約六千人の命を救った史実と、その前後の出来事が、妻・幸子氏の視点で記されています。 時は1940年。ポーランドからナチスの手を逃れてきたユダヤ人たちが、第三国へ移住するための日本通過ビザを求めて、リトアニアの日本領事館へ詰めかけます。 しかし、当時の日本はドイツと協定を結んでおり、日本領事館がユダヤ人にビザを発行することは、ドイツへの敵対行為となることでした。 杉原氏は悩みに悩んだ末、ビザを発行します。外務省からの許可はなく、自身だけでなく家族にもナチスの手が伸びるかもしれない危険な状況下にも関わらず、杉原氏は人道的見地から英断を下します。 もし自分が杉原氏の立場だったら、どのような判断をしたらろうか。究極の選択を迫られた時に、安易に保身に走らず、当たり前の人間としての行動ができるかどうか、突き付けられた思いがします。 第二次世界大戦下の海外で、一人の日本人がとった行動について記したこの著書は、日本の未来を担い、今後世界で活躍が期待されている若い世代の皆さんに、ぜひ読んでいただきたい一冊です。
--	---

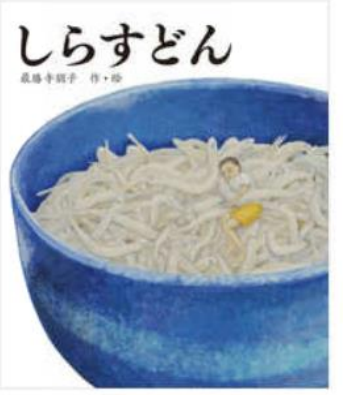
	『もりのへなそうる』 わたなべ しげお／著 やまわき ゆりこ／絵 福音館書店
	私が子どものころ、親からよく読み聞かせてもらって思い出に残っている本です。自分の子どもにも読み聞かせをするととても喜んで楽しい気持ちになるようです。 この本は、てつたくんとみつやくんの兄弟が家の近くの森へ探検に行くおはなしです。森の中での探検は、二人が想像したもうじゅうと闘いながら先へ先へと進んでいきます。その二人の様子は頼もしくもあり、掛け合いにクスッと笑ってしまいます。そして、その先にあったのは大きな「たがも」ではなく大きな「たまご」。 次の日もその「たまご」を探しに森へ行くのですが、そこには「たまご」の姿はなく、近くにいたのは変な「どうつぶ」ではなく「どうぶつ」。その変などうぶつと二人の兄弟はおもしろおかしく森の中で過ごします。 子どものころ、「どこかに探検に行きたい。」がすぐそこにあるようなお話です。 ひらがなで書かれているので、小学校低学年の子が少し長めの本を初めて読むのにちょうどよいのではないのでしょうか。また、読み聞かせで小学校中、高学年の子に聞かせるのも楽しいと思います。 一緒に森の中を探検してみませんか。
推薦者	中島 忠相 氏(神奈川県教育委員会教育局生涯学習部生涯学習課)

	『海辺の宝もの』 ヘレン・ブッシュ／作 鳥見 真生／訳 佐竹 美保／絵 あすなろ書房
	19世紀イギリス南部の町ライム・リージスで、化石の発掘により古生物学に貢献したメアリー・アニングの子ども時代を描いた作品です。原著は1965年発行で、1977年版の邦訳を子どもの頃に読みましたが既に絶版でしたので、こちらの新訳を紹介します。 主人公が、困難に遭いながらも好きなことを追求し続け、大きな発見に至る展開や、同級生とあまり打ち解けずにいたけれども、仲良くすることはそれ程難しいことではないと気付く展開は、伝記とはいえ若干の脚色が入っているようですが、子ども向け読みものとしてお薦めです。 メアリー・アニングについては他にも児童書や漫画版の伝記があり、2021年に絵本も出版されています。
推薦者	松島 隆志 氏(神奈川県教育委員会教育局生涯学習部生涯学習課)

	『いいね！』 筒井 ともみ／作 ヨシタケシンスケ／絵 あすなろ書房 ある学級の子どもたちが、一人ひとり、自分が「いいね！」と思うものやことを紹介します。子どもながらの発想にクスッと笑ってしまったり、その子が「いいね！」と思うことに共感したり、子ども向け？でもあるためか、文章自体は少なく、あっという間に読み終わりました。 大人になった今、子どもの頃の感覚ってなくなってしまったのかな？とさみしくなる一方で、一人ひとりきらりと輝く個性があることを実感させてもらえます。 この本に登場する子どもたちに共通するのが「ネコ」の存在なのですが、この「ネコ」がいるため、一人ひとりの個から集団になるしかけなのだろうと感じました。個性はあるものの、集団となって生きていく社会なので、子どもの姿を通して、多々、考え深いものがありました。 小さなことでクヨクヨしていても仕方ない。楽しく生きていこう！と思えるような本でもあるなと感じました。 文章と共に、「ヨシタケシンスケ」さんの絵がふんだんに取り入れられているので、文章のイメージが良くわかります。 子ども・大人のどちらにも紹介できる本だと思います。
推薦者	品田 博行 氏（神奈川県教育委員会教育局湘南三浦教育事務所）

	『青空と逃げる』 辻村 深月／著 中央公論新社 物語は高知・四万十川で幕を開けます。夏休みに本条力と母親の早苗は東京から逃れ、高知・四万十川の食堂に身を寄せています。父親の拳と有名女優の遥山真輝の事件がきっかけで、エルシープロの人間に追われているのです。 主人公の力と早苗の視点で心情が丁寧に描かれ、物語は進行していきます。高知・四万十川、兵庫・家島、大分・別府、宮城・仙台を転々とし、終わりの見えない母子の逃避行が続いていきます。それぞれの土地で、追われる身である力と早苗は地元の人達に受け入れられ、生活していこうと努力します。そんなある日、遥山真輝の息子が突然現れて、物語は急展開を見せます。 私は夏にコロナ禍で自粛生活を続けながら、この作品を読み、旅をしたような気分になりました。それぞれの土地の風景が目に見えようでした。特に別府温泉にある砂湯の場面では、蒸し暑さを想像して実際に汗をかいてしまいました。 辻村深月の作品は最後まで安心して読めて、優しい文体と意外な展開が魅力です。幅広い世代の方々にお薦めします。
推薦者	石井 隆二 氏（神奈川県教育委員会教育局県央教育事務所）

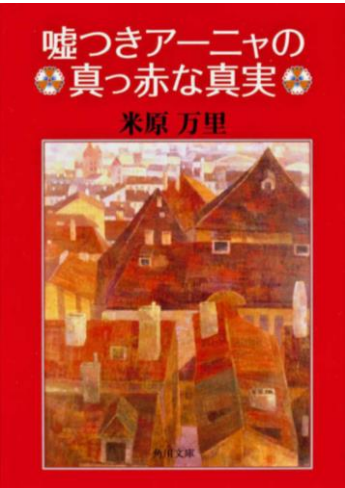
	『図南の翼 十二国記』 小野 不由美／著 新潮社
	「まだるっこしいったら、ありやしない。大人が行かないのなら、あたしが行くわ」 神獣である麒麟が、王を選ぶ世界。先王が亡くなって27年、未だに恭国では新しい王が選ばれずにいた。早に洪水、妖魔の出現と、災厄が降りかかる国を憂いて、12歳の珠晶は旅立つ。麒麟が住む蓬山を目指して、王になるために。 珠晶はいつも怒っている。あなたは、珠晶をどう思うだろう。齒に衣着せぬ物言いに、痛快さを感じるだろうか。生意気だと眉をひそめるだろうか。友達にしたいと思うだろうか。傍から見てくくらいで良いと思うだろうか。それとも彼女に、大人の頼りなさ、欺瞞、伝わらない気持ちを託して、応援するのだろうか。 子どもの私に薦めたい一冊である。そして、珠晶と旅を終えたあなたと語り合いたくなる物語である。
推薦者	岡田 舞 氏(神奈川県教育委員会教育局中教育事務所)

	『しらすどん』 最勝寺 朋子／作・絵 岩崎書店
	神奈川県民にとって、とても身近な海産物である「しらす」。私も大好きです。 でも、「しらすになってみたい」とは、考えたこともありません。食べたらずともおいしいけれど、海でしらすとして生きていくのは、ちょっと大変そうです。 “じぶんが しらす だったらって、かんがえたこと ある？” 庭でトンボを捕まえて遊ぶ元気なりょうくんは、自分が食べ残したしらすどんが盛られていたどんぶりに問いかけられます。そして、りょうくんは不思議な世界に吸い込まれて……。 食べ物を大切にしないといけないこと。小さな生き物だって一生懸命大きくなったこと。いのちの大切さ。りょうくんは、小さな「しらす」からたくさんのことを学びました。 何だか、しらすどんが食べたくなくなります。 もちろん、しらすは1匹も残さずに。 大人にも子どもにも、お薦めの一冊です。
推薦者	神谷 啓之 氏(神奈川県教育委員会教育局県西教育事務所)

	『3匹のかわいいオオカミ』 ユー・ジーン・トリビザス／著 ヘレン・オクセンバリー／絵 こだま ともこ／訳 富山房
	(推薦文) 多くの方が知っている「3匹のこぶた」とは異なり、ブタとオオカミの立場が逆転した話です。 あるところに、3匹のかわいいオオカミとお母さんが一緒に暮らしていました。ある日、お母さんから、広い世界を見るためにも、家を出て自分たちの家を作るように言われました。3匹のオオカミは協力して家を作りますが、1匹の悪いおおブタがやってきて、作った家を次々と壊してしまいます。次こそは壊されないようにと、試行錯誤しながら家を作る3匹のオオカミ。そして、その家を何とか壊そうとするおおブタ。はたしてその結末は……。 オオカミたちが頑張って作った家を、何としても壊そうとするおおブタの行動は決してよいものではありませんが、次々とくりひろげられるオオカミとおおブタの攻防戦は面白く、子どもから大人まで楽しめる本だと思います。読み聞かせにもおすすめの一冊です。
推薦者	土肥 由実 氏(神奈川県教育委員会教育局県西教育事務所)

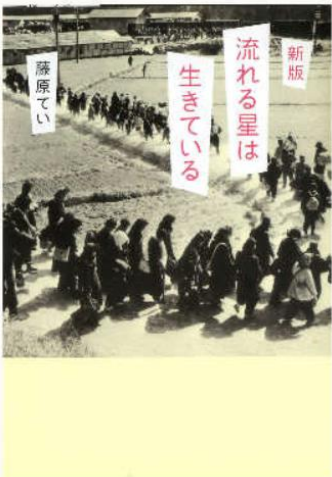
令和2年度に書かれた推薦文

	『神去なあなあ日常』 三浦 しをん／著 徳間書店
	神去(かむさり)は、三重県の山奥にある村の名前。「なあなあ」とは、村人の口ぐせで、「ゆっくり行こう」「まあ落ち着け」といった意味です。 主人公の平野勇氣は、将来の目標もないまま、横浜の高校を卒業しましたが、いつの間にか、林業研修生として神去村へ行くことになってしまいます。 携帯電話はまさかの圏外、夜は真っ暗闇の究極の田舎生活。下を見ると震えが止まらなくなる高い木に登り、枝を切り落とす命懸けの仕事。 最初は逃げ出したいと考えていた勇氣ですが、村や山でさまざまな体験をするうちに、徐々に気持ちが変わり始め、そして遂に、怒涛のクライマックスがやって来ます… この小説の魅力は、3つの描写の素晴らしさではないでしょうか。 一つ目は、登場人物の描写。ワイルド&タフなヨキ、可愛い山太とノコをはじめ、個性あふれる村人たちとのユニークなふれあいが、勇氣の心を揺さぶります。 二つ目は、お仕事小説としての描写。何代にもわたり黙々と日本の山を守り続けてきた林業の仕事が、とても丁寧に描かれており、その中で勇氣も少しずつ確かに成長していきます。 三つ目は、自然に関する描写。壮大な自然と共に暮らす喜びが、美しい風景画のように描かれる一方で、人間には決して逆らえない自然の偉大さ、恐ろしさが、いにしえから山と神を結びつけてきた村で起きる不思議な出来事を通して、読者にもひしひしと伝わってきます。 どんなに世の中が変わっても、人と人がふれあい、助け合いながら生きていくことの大切さは決して変わらない。そんなことを考えさせてくれる、ほのぼの「なあなあ」な神去村の日常を、勇氣と一緒にあなたも楽しんでみませんか。
推薦者	田熊 徹 氏 (神奈川県教育委員会教育局生涯学習部)

	『嘘つきアーニャの真っ赤な真実』 米原 万里／著 KADOKAWA
	以前、県の事業でロシア語の同時通訳をしていただいた米原万里氏。その完璧で誠実な仕事は印象に深く、憧れとともにその名は記憶に深く刻まれておりました。本書を手にしたのはそのような御縁、そしてプラハの美しい街並みの装画を配した深紅の表紙と不思議な表題に心惹かれてのことからでした。 本書は氏による中・東欧での体験をもとにしたノンフィクションです。著者は1960～64年の間、9歳から14歳までの多感な時期を在プラハ・ソビエト学校で、50カ国以上の国の子供たちと共に過ごしました。表題作と「リッツアの夢見た青空」、「白い都のヤスミンカ」の3編の主人公はいずれも当時の著者の同級生です。その時の学校生活と個性豊かでチャーミングな友人たちとの交流が生き生きと描き出されるとともに、帰国後30年余の時を経た1990年代、彼女達を捜し出し再会して知るその後の人生と少女時代には分からなかった真実が、中・東欧の文化や民族、20世紀後半の激動の歴史の中で明かされていきます。 もし自分が彼女達の立場だったらどんな生き方を選んでいただろう。 時空や国境を越えて重なり合う人と人との絆、「具体的に生きるだれか」に対する想像力を互いの多様な文化を認め合う方向で持つことの大切さについて深く考えさせられる珠玉の一冊です。
推薦者	大村 留美江 氏(神奈川県教育委員会教育局生涯学習課)

	『バッタを倒しにアフリカへ』 前野 ウルド 浩太郎／著 光文社
	「バッタに食べられたい」という子どもの頃からの夢を叶えるため、そして、バッタ被害を食い止めて人類を救うため、単身西アフリカのモーリタニアに乗り込んだ著者、通称「バッタ博士」。 バッタ博士が異なる文化に生きる人々と心を通わす姿や、無収入の危機＝研究継続の危機に立ち向かう姿、まさかのバッタ無発生という状況にも腐ることなく知恵と工夫で研究を進める姿に、私は驚いたり、笑ったり、感心したり、勇気をもらったりしました。 表紙のバッタになった博士の写真にひるまず、軽妙な文章と豊富な写真でつづられたおもしろエピソード満載の科学冒険就職ノンフィクションをぜひお楽しみください。 そして、名前にある「ウルド」の意味や、バッタアレルギーの博士が、念願叶ってバッタの群れに身を投じることができたのか、確かめてみてください。 ※『ウルド昆虫記 バッタを倒しにアフリカへ』として、児童版も出版されています。
推薦者	尾上 夏子 氏(神奈川県教育委員会教育局生涯学習課)

	『みをつくし料理帖シリーズ(全10巻)』 高田 郁／著 角川春樹事務所
	時代は江戸時代後期、舞台は江戸、当時は珍しかった或る女料理人の波乱万丈の物語です。 主人公の名は濡(みお)、彼女は幼い頃、ふとしたことからある有名な易者に「雲外蒼天」の顔相と占われます。「雲外蒼天」とは、厚い雲の向こうには青空があるということから、様々な苦難はあっても、いつの日か必ず報われるといった意味です。この占いのとおり、濡は、様々な苦労や困難にあいながらも、自らの努力と周囲の助けを得て、それらを乗り越え、自らの道を切り開いていきます。 この小説は、起伏のあるストーリー展開の中に、「食」を巡る様々なエピソードが盛り込まれており、物語としての面白さが存分に味わえるとともに、友情の尊さ、他者への思いやりや誠実であることの大切さ、幸せや生きることの意味など、人生にとって大事なものが一杯詰まっている気がします。 ちなみに、著者の高田郁さんは、小説家になる前は、漫画の原作者として活躍されていたようです。そのためか場面描写がとても細やかで、綿密な時代考証とあわせ、そのときどきの情景が眼前に浮かび上がってくるような上手さがあります。そんなことから、映像化にも適しているようで、黒木華さん主演でテレビドラマ化されたほか、映画化も企画されているようですので、普段読書に馴染のない方は、ドラマや映画を見てから、原作を読むのもお勧めです。 人生100歳時代といわれる今日、若い皆さんには、これからの長い人生を歩む中で、様々な苦難が待ち受けているかもしれません。そんな時にふと手にすると、何か勇気をもらえる、まさにそんな小説だと思います。
推薦者	松井 聡明 氏（神奈川県立図書館）

	『流れる星は生きている』 藤原 てい／著 偕成社
	夜空を見上げると、心に浮かんでくることは何ですか。人によって、時によって、それは変わるものでしょう。明日の天気のことだったり、その日一日の出来事だったり。または、将来の夢、あるいは不安といったことかもしれません。 本書『流れる星は生きている』は、著者の藤原ていが、幼い子ども3人を連れて戦争終結間近の昭和20年8月9日から一年余りかけて、北朝鮮の地から故郷日本へ帰るまでの出来事を綴っています。本当にあったこと、体験したことが書かれているノンフィクションというジャンルの本です。著者はその旅路で壮絶な体験をします。飢えと寒さの中、生命の危機を何度も乗り越える親子4人の姿は、勇気と希望を教えてくれると同時に、現実の恐ろしさ、人間の残酷さも教えてくれます。藤原ていが、夜空を見上げたとき、心に浮かんだことは何だったのでしょうか。 この本を読んだ後、夜になったら空を見上げてください。星があったら、星を見てください。読書は、景色を見ることでお腹がいっぱいになるという体験をもたらしてくれます。
推薦者	山根 千知 氏（神奈川県立図書館）

	『神様からひと言』 荻原 浩／著 光文社 大手広告代理店からワケあって中堅メーカー「珠川食品」に再就職した主人公 佐倉涼平 27歳。入社して4カ月、新製品の決裁会議でトラブルを起こし異動となる。異動先は「お客様相談室」。社内では「リストラ要員の強制収容所」と呼ばれている部署である。お客様相談室には日々、様々なクレームや要望が寄せられるが、その仕事に苦悩しながらも同僚（個性豊かなメンバー）とともに奮闘する主人公の姿が描かれている。 自身も会社員だった作者の荻原さんは、こんな風に語っている。「会社員時代、手ひどいトラブルに見舞われた時や、逃げ出したくなるような決断に迫られた時、同僚の一人がよくこう言ってました。『だいじょうぶ、死にゃあしねえよ』ほんとうにそう。死ぬほどつらいのは、生きている証拠です。」 笑いあり涙あり、すべての人に元気をくれる物語である。
推薦者	都 浩一 氏（神奈川県教育委員会教育局湘南三浦教育事務所）

	『目の見えない人は世界をどう見ているのか』 伊藤 亜紗／著 光文社 「く見えない」ことは欠落ではなく、脳の内部に新しい扉が開かれること。」本書の扉にある、生物学者・福岡伸一氏の言葉です。指先で点字を読むことができ、わずかな音を手がかりに空間のイメージを持つことができる視覚障害者の姿から、視覚の代わりに触覚や聴覚が発達するのだ、というだけのものではありません。 点字を例にすると、点字を理解することは、純粋な触覚の働きではなく、むしろ見える人が目を使って「読む」ときの脳の働きに近い、しかも視覚皮質野といわれる視覚をつかさどる場所で情報処理を行っているという研究結果が紹介されています。つまり、視覚の欠如とは単なる引き算ではなく、体や脳の使い方の新たなバランスを獲得することでもあるということです。 そもそも障害とは何でしょうか、と筆者はまとめて問いかけます。産業社会の発展によって生まれた「能力の欠如」としての障害のイメージ、引き算のイメージが、私たち個人の中に根付いてしまっていることに気づかされました。障害は個人に属するものでなく、社会の側にある壁であるという改正障害者基本法の考え方は少しずつ浸透してきていますが、社会のしくみだけでなく、一人一人の意識が変わることが欠かせないという点からも、おすすめしたい一冊です。
推薦者	沖野 僚太郎 氏（神奈川県教育委員会教育局湘南三浦教育事務所）

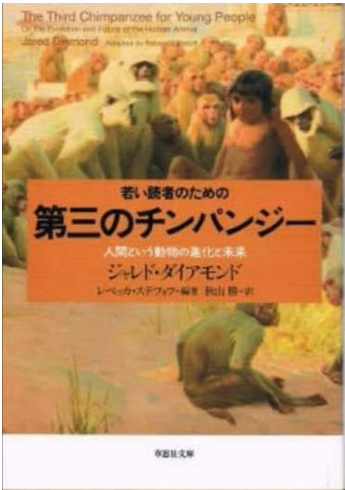
	『ルーズヴェルト・ゲーム』 池井戸 潤／著 講談社 この「ルーズヴェルト・ゲーム」は、業績不振に苦しむ青島製作所を舞台に、「会社の繁栄か倒産か。」はたまた「野球部の存続か廃部か。」という厳しい現実をつきつけられた中で、人生を賭けた者たちの戦いが描かれた作品です。 「一番おもしろい試合は、8対7だ。」 これは、野球を愛したアメリカ合衆国第32代大統領、フランクリン＝ルーズヴェルトが言った言葉です。読み進めていく中で、著者が、この題名にした意味にも気づくのではないのでしょうか。 この本は、読んだ人に勇気を与えてくれるおススメの一冊です。ぜひ、読んでみてください。
推薦者	鈴木 智久 氏(神奈川県教育委員会教育局県央教育事務所)

	『きみ江さん ハンセン病を生きて』 片野田 斉／著 偕成社 66歳にして18歳の養女を迎えた元ハンセン病患者である山内きみ江さん(1934年、静岡県藤枝市生まれ)は、親として若者の考え方を理解しようと、テレビで見た上野の「ガングロ」娘たちのところに単身で乗り込みます。そして、「人間というのはうわべだけではわからない。接してみないとわからない。」と、その少女たちから大切なことを教わります。 「ハンセン病」は「らい菌」による感染症です。「らい菌」は熱に弱いため、体温の低い顔・手・足など人の目にふれる箇所に知覚麻痺のある皮疹や運動麻痺などの病変が現れます。日本では「らい予防法」という法律により患者の強制隔離が長く続くと共に、「遺伝する伝染病」という誤った思い込みが広まったことにより、長い間、患者や元患者、その家族が差別や偏見に苦しんできました。実際には、「らい菌」の感染力はとても弱く、健康な人が感染しても発病はしませんし、現在では治療により確実に治る病気となっています。 人間として当たり前に生きることを許されなかったハンセン病患者・元患者が受けてきたいじめや差別、偏見について知るだけでなく、負けず嫌いで好奇心旺盛なきみ江さんの生き方を通して、「生きるって楽しい」と思える元気をもらえる一冊です。
推薦者	小菅 聡子 氏(神奈川県教育委員会教育局中教育事務所)

	『しっぱいにかんぱい！』 宮川 ひろ／著 童心社 誰もが一度は経験したことのある「しっぱい」。みなさんは、「しっぱい」した時の感情と、どのように付き合っていますか。 『運動会では、1年生からずっとリレー選手だった加奈。6年生となった今年はアンカーを任されました。ところが運動会のリレーで、まさかのしっぱいをしてしまい、落ち込んでしまいます。そんな時、おじいちゃんから電話が…。』 この本を読み始めたときは、加奈の「しっぱい」に、私も落ち込んだ気持ちになりましたが、最後には不思議と前向きな気持ちになりました。どうしても「しっぱい」はマイナスに捉えられがちですが、この本は「しっぱい」の先にある希望や勇気を感じさせてくれます。読むだけでエネルギーをもらえる本です。 また、他にも、『うそつきにかんぱい！』『わすれんぼうにかんぱい！』などシリーズになっています。子どもから大人まで十分楽しめます。
推薦者(所属)	樋口 憲一 氏(神奈川県教育委員会教育局県西教育事務所)

	『あすはきっと』 ドリス・シュワーリン／文 カレン・ガンダーシーマー／絵 木島 始／訳 福音館出版 「きょう」はどんな日だった？ うれしかった？ かなしかった？ 寝る前にわが子に読み聞かせています。 子どもも、お気に入りの一冊になっています。 子どもに読み聞かせていますが、この絵本から元気をもっているのは大人の自分自身でもある気がします。 絵本は、同じ絵や文章であっても、大人と子どもでは受け取り方が違うのが魅力の一つだと思います。 特にこの絵本は、その人がどんな一日を過ごしたのか、その人が今、どんなことを思っているのかによって感じ方が違うと思います。 「きょう」という日がどうであれ、「あす」はみんな平等にやってきます。 子どもも、大人も「あす」を迎えるのが楽しみになります。 そんな「あす」に希望を持たせてくれる一冊です。 ぜひ、ご覧ください。
推薦者(所属)	大平 章人 氏(神奈川県教育委員会教育局県西教育事務所)

	『10代の哲学さんぽ⑧ 人がいじわるをする理由はなに?』 ドウニ・カンブシュネ／著 伏見 操／訳 岩崎書店 人はなぜ、いじわるをするのだろう。 また、「いじわるな人」とは、どんな人のことだろう。 人の嫌がることをするのが「いじわる」であるけれど、でもそうしたからといって、その人が必ずしもいじわるな心をもつとは限らない。 「いじわる」にも程度や種類があり、複雑な構造をしているのです。 「人間とはもともと矛盾した存在だが、強いプレッシャーにさらされると、さらにそれがひどくなる。そうして磁極にふれておかしくなった方位磁石のように、判断がくるってしまう。」 と、イタリアの作家 プリーモ・レーヴィは語りました。(本文より) 人の心の在り方や行動の仕方を、多面的・多角的に考え追求することができる、哲学の入門書としてもおもしろい一冊です。
推薦者(所属)	長山 武司 氏(神奈川県教育委員会教育局県西教育事務所)

	『若い読者のための 第三のチンパンジー ―人間という動物の進化と未来』 ジャレド・ダイヤモンド／著 レベッカ・ステフォフ／編 秋山 勝／訳 草思社 「人間とチンパンジーの間で、構成する遺伝子の違いはたった2%である。このわずかな違いが私たち人間に特有な性質をもたらしている。」(本書より) では、人間特有の性質とは? 言葉によるコミュニケーション、複雑な道具の使用、芸術の創造等が挙げられます。また、同じ種である人間を殺戮し、他の種を絶滅に追いやるのも人間特有の性質と言えるかもしれません。 本書では、こうした善悪両面に及ぶ人間の性質について、様々な側面から科学的に検証しています。 例えば、第8章「農業がもたらした光と影」では、私たちも知っているように、農耕生活獲得の光の部分として、定住と食料の貯蓄、健康と長命、安全と余暇の獲得、ひいては、文化、芸術の発達や高度な文明の獲得が示されています。しかし一方で、男女間や社会階層間での不平等や争い、人口密集や動物の家畜化による伝染病の蔓延、凶作による食糧不足や飢餓等が影の部分として指摘されています。 私たちが当たり前と思っていたことに新たな視点を与え、「私たち人間はどんな生き物なのか?」「今後どのように生きていくべきか?」について大いに示唆を与えてくれる本書をぜひ手に取ってみてください。 「この本に出会って、人生が変わった!」 あなたにとって、そんな本になるかもしれません。
推薦者(所属)	小林 裕史 氏(神奈川県教育委員会教育局県西教育事務所)

令和元年度に書かれた推薦文

	『 レインツリーの国 』 有川 浩 著 新潮社
	ライトノベルの第一人者である有川浩の作品です。 内容は、関西人の男性と聴覚に障がいのある女性とのラブストーリーで、本が好きな二人のやり取りが微笑ましく描かれています。一方で、健常者と障がい者の間にある心の中の高い壁の存在を強く感じ、共生社会を実現することの難しさも感じられました。 全体的に読みやすく展開の早い作品ですが、障がいのある人だけではなく、様々な個性を持った人たちとの付き合い方について、改めて考えさせられる作品でした。 映画化もされていますので、映画を見てから書籍を読んでも十分面白いと思います。
推薦者	高梨 信行 氏（神奈川県教育委員会教育局生涯学習課）

	『新釈「蘭学事始」—現代語ですらすら読める』 杉田 玄白／著 長尾 剛／翻訳 PHP研究所
	『解体新書』とは、1774年に刊行された日本最初の西洋医学書の翻訳書です。ドイツ人クルムスの『解剖図譜』のオランダ語版『ターヘル-アナトミア』を前野良沢・杉田玄白らが翻訳しました。 『解体新書』の著名、そして翻訳の中心となった前野良沢・杉田玄白の名前は広く知られています。しかし、『解体新書』が完成されるまでの過程をみなさんにご存知でしょうか。翻訳者の1人である杉田玄白の晩年の回想録である『蘭学事始』にその一部始終が描かれています。 鎖国下で日本が貿易を行っていた国の中で、唯一のヨーロッパの国はオランダでした。当時の日本では、オランダ語で書かれた書物を通して、ヨーロッパの新しい知識を知ることができました。 日本の医学の発展のために、前野良沢と杉田玄白は西洋医学書の翻訳を決意したのです。しかし、前野良沢は約700語のオランダ語の単語を知っているに過ぎず、杉田玄白はアルファベットさえ知りませんでした。この時代、辞書やインターネットはありません。翻訳作業は、パズルを読み解くような作業であり、1つの文章が分かるのに丸一日かかるという具合であり、翻訳に3年以上の年月がかかりました。 本書は、文章量が少なく、原文ではないため読みやすくなっています。『蘭学事始』を読めば、辞書やインターネットが普及している今の時代の語学学習が容易に感じられるのではないのでしょうか。
推薦者	櫻木 萌季 氏（神奈川県教育委員会教育局生涯学習課）

	『グリドングリドン』 宮西 達也／作・絵 ひかりのくに 「グリドン、グリドン」と呪文をと念えると、なんでも願いをかなえてくれる魔法のどんぐり。 ある日、“ねこ”から魔法のどんぐりを取り上げた、究極にぐうたらな王様は、お城からけらいを追い出し、ぐうたらし放題。まちに出てはいたずらし放題。後先を考えずに魔法のどんぐりを使っていると・・・ クライマックスは、大どんでん返し！ 「先々のことを考えて計画的に物事を考えることの大切さ」を示唆する物語であるとともに、大人から子どもまで、「自分だったら、どんな願いをかなえようかな」と夢と想像が広がる素敵なお話です。
推薦者	櫛田 和哉 氏（神奈川県教育委員会教育局中教育事務所）

	『めっきらもっきらどおんどん』 作：長谷川摂子 絵：ふりやなな 福音館書店 この「めちゃくちな歌」を歌えば、少しおかしい友だちと素敵な経験ができるかも。 私が子どもの時にこの絵本に出会い、主人公と同じ気持ちになりながら夢中で読みました。近くの神社に行ったら、「あの世界」への入口を探しました。 親になってからは自分の子どもに読み聞かせています。子どもたちは絵本の世界に入り込み、とても楽しそうに聞いています。 自分もこんな風に絵本の世界に入り込んでいたんだと思うと、何か特別な思いがします。 この子もいつか、自分の子どもに読み聞かせる日がくるのかな・・・ 世代を超えて楽しめることも絵本の魅力だと思います。 ぜひ、親子で読んでください。 親子で「めちゃくちな歌」を歌ってください。 不思議で楽しい、素敵な世界へご案内します。
推薦者	大平 章人 氏（神奈川県教育委員会教育局県西教育事務所）

	『砂漠』 伊坂 幸太郎 著 実業之日本社 「良い本」の条件とは？ 一つに、「何度読み返しても飽きずに楽しめる、新たな発見がある本」ではないかと思えます。 伊坂幸太郎の作品の中でも人気ベスト3に入るといわれる本書ですが、個性的な主人公、テンポの良い会話、巧みなストーリー構成、物語に引き込まれること間違いありません。 ちなみに私はこれまでに本書を4回読みました。 「その気になればね、砂漠に雪を降らすことだって、余裕でできるんですよ。」等、主人公の一人である西嶋の熱く真っ直ぐな言葉も本書の大きな魅力の一つです。 東北の大学生5人を主人公にした爽やかな青春小説。 これから学生になる皆さんにも、かつて学生であった皆さんにもぜひ読んでほしい一冊です。
推薦者	小林 裕史 氏(神奈川県教育委員会教育局県西教育事務所)

平成31年度に書かれた推薦文

	『花神(上・中・下)』 司馬 遼太郎 著 新潮文庫 この本のタイトル「花神」とは、読んで字のごとく花の神様のことですが、「花咲じい」と言った方が分かりやすいかもしれません。主人公は、幕末・維新の兵部省大輔(次官)であった大村益次郎(村田蔵六・良庵)です。「花咲じい」と軍事司令官である兵部省大輔では、なんとなくミスマッチで、なぜ「花神」というタイトルなのかと不思議に思われる方もいると思います。その謎は、本を読んでものお楽しみとして、この本の中で、長州藩(現在の山口県)の村医者であった彼が、どのようにして「花神」となったのかが語られます。 幕末動乱の時代には、多くの英傑が登場しましたが、大村益次郎は、西郷隆盛や大久保利通、木戸孝允や高杉晋作、あるいは坂本龍馬のような幕末・維新のスーパーヒーローのように有名でもないし、人気もありません。また、高杉晋作から「火吹きだるま」とあだ名されたように、頭が異常に大きく、見た目もあまりパツとしませんでした。しかし、その地味なパーソナリティとは裏腹に、彼らに決して引けを取らない大きな業績を残したのです。 私がこの本を推薦するのは、一見するとヒーローとは程遠い大村のような人が、自らの「花」を見つけ出して、その才能を大きく開花させたのはなぜなのか、それを考えることが、皆さんお一人おひとりの「花」を咲かせるためのヒントになるかもしれないと考えたからです。そして、若い皆さんには、それぞれの「花」を見つけ出して、大きく咲かせていただければと思います。
推薦者	松井 聡明 氏(神奈川県教育委員会教育局生涯学習部)

平成30年度に書かれた推薦文

	『たまごにいちばんシリーズ あきやまただし』 あきやま ただし／作・絵 すずき出版 小学校の担任をしている時期に、図書館で読み聞かせに良い本ないかな～？と探していて、出会った本です。(私の選本の基準は、・読んでいて苦痛にならない長さ＝聞いていて飽きない長さ。)作者のあきやまさんの子どもへの思いがすごく伝わってくる絵本です。一冊一冊、テーマがあるので、読み聞かせではあきやまさんのメッセージ(巻頭に書かれています。)も子どもたちに読みました。 子どもから大人まで、楽しめる本だと思います。 大人になっても、たまごのからをかぶっていたい時って、ありませんか。
推薦者(所属)	瀧澤 和人 氏(神奈川県教育委員会教育局生涯学習課)

	『14歳からの哲学 ―考えるための教科書―』 池田 晶子 著 株式会社トランスビュー 14歳という時期を、遥か昔に通り過ぎた私が思い返すと、何がそんなに楽しかったのか分からないけど楽しかった友達との学校生活があり、一方で些細なことや漠然とした将来への不安なんかで頭がいつももやもやしていた覚えがあります。そんな時に出会っていれば、というのがこの本です。こんな一節があります。「生きているということ、自分がいるということの謎は、そのまま、宇宙があるということの謎だ。謎は、それが、『ある』ということだ。『ない』のではなくて、『ある』ということだ。最も当たり前のことこそが、最も驚くべき謎なんだ。」悩みなんて宇宙の成り立ちや存在の謎に比べればちっぽけなもので、それ以前に、悩んでいる自分が「ある」ことの方がよっぽど不思議じゃないか、というわけです。悩みの根本的な解決にはなりませんが、筆者の「生きているということは、それ自体が謎なんだということを知って生きるのと、知らずに生きるのとでは、人の人生はまったく違ったものになるんだ。(中略)その味わいや深みやらが、それはもう本当に違うんだ。」という考え方は、自分にとって大切なものになっています。
推薦者(所属)	沖野 僚太郎 氏(神奈川県教育委員会教育局湘南三浦教育事務所)

	『はじめてのおつかい』 筒井 頼子 著 林 明子 絵 福音館書店
	皆さんは自分が初めて「おつかい」に行ったときのことを覚えていますか。私は今でも覚えています。渡されたメモに書いてある数字を読み間違えたまま、品をかごへ入れてレジへ行くと、持たされたお金では足りず頭が真っ白になったこと。それでもなんとか頼まれたものを買って家に戻るとほめられたこと。この本は、誰もがドキドキした「はじめてのおつかい」を描いた本です。 今でこそ、スーパーやコンビニエンスストアでの買い物が主流となり、個人商店で買うことなどなかなかない現在、この絵本の主人公であるみいちゃんの姿に、かつての自分の姿を重ねて読む人は多いのではないのでしょうか。 小さい手に100円玉を2枚しっかりと握りしめ、坂の上にあるお店まで行く道中も、なんとかお店についた後も、お母さんに頼まれた牛乳を買うまで緊張や困難の連続です。林明子さんが描く絵もこの本の世界観と合っていてとても素敵な絵本です。読み聞かせにもおすすめの一冊です。
推薦者(所属)	松山 愛 氏 (神奈川県教育委員会教育局県央教育事務所)

	『本日は、お日柄もよく』 原田 マハ / 著 徳間書店
	「困難に向かい合ったとき、もうだめだ、と思ったとき、想像してみるといい。三時間後の君、涙がとまっている。二十四時間後の君、涙は乾いている。二日後の君、顔を上げている。三日後の君、歩き出している」(本文より) 主人公が恋や仕事に悩みながら、運命的にであった「スピーチライター」と、人とのつながりから紡ぐ物語。 私は言葉がもつ力、そして、人に寄り添うことの尊さを感じ、勇気づけられました。皆さんは何を感じるでしょうか。
推薦者(所属)	尾上 夏子 氏(神奈川県教育委員会教育局県西教育事務所)

平成29年度に書かれた推薦文

	『息子・秋雪との六年 たったひとつのたからもの』 加藤 浩美／著 文藝春秋 子どもの誕生、その命と向き合い共に生きること。どんな状況に置かれても、そのときそのときを精一杯愛し楽しむこと。お互いの命を感じ合い、いつくしみ合うこと。 この本は、重い心臓病とダウン症を持って生まれた秋雪くんが、両親と共に人生を精一杯歩んだ6年間を、母親の手で書かれたものです。 「1歳のお誕生日を迎えるのは難しい」「生後半年の間に風邪をひかせたらおしまい」という命の宣告を受けながらも、「〇〇ができるようになった」「～に行くことができた」大切に生きた6年2カ月の日々。その一つ一つが、命の輝きと成長の喜びにあふれキラキラしています。 自分に初めて子どもが生まれた年に出版されて出逢いました。 初心に帰れる本です。子どもにも大人にもオススメです。
推薦者(所属)	岡本 桂子 氏(神奈川県教育委員会教育局生涯学習課)

	てんかぜ 『天風の吹くとき』 福 明子／作 小泉 るみ子／絵 国土社 てんかぜ 「天風」って聞くと、どんな風を想像しますか。「さわやかな風」「激しい風」など、様々な風が頭に浮かんでくるのではないのでしょうか。いったいどんな風なのでしょう。 主人公の林子は十一歳。夏の間、たったひとりで東京から、この鳥ヶ峰にやって来ました。明るく元気な林子には、実は大きな秘密があったのです。 毎年行われる「風の祭」に向け、街中が準備で盛り上がっていたある日、従兄弟の一太は、林子の秘密を知ることになります。そして、林子もまた、一太の秘密に気がつきます。互いの秘密を知った一太と林子、そして他の友達との思い出いっぱいの毎日が、自然豊かな鳥ヶ峰を舞台に繰り広げられます。 この本は、読み進めていく中で、生命の強さや思いやりの温かさ、勇気の大切さが伝わってくるお薦めの一冊です。ぜひ、読んでみてください。
推薦者(所属)	鈴木 智久 氏(神奈川県教育委員会教育局生涯学習課)

	『このあと どうしちゃう』 ヨシタケシンスケ ブロンズ新社
	死んだおじいちゃんの部屋から「このあと どうしちゃう」と書かれたノートが見つかった。そこには、おじいちゃんが想像した死んだあとのことがたくさん描かれていた。「うまれかわったらなりたいもの」「みんなをみまもっていくほうほう」など、なんだか楽しそうなおじいちゃん。でも、ちょっとまてよ・・・もしかしたら逆だったのかもしれない。 ほんとは、すごくさみしくて死ぬのがこわかったのかもしれない。どっちだったんだろう。こわかったのかな？ 楽しみだったのかな？ おじいちゃんのノートから受け取ったメッセージとは・・・。 私の娘が何度も何度も読み返していた本です。この本を読んだ後に、「いきているあいだは どうしちゃう」ノートを書いていました。クスッと笑え、ジーンと心があたたかくなるような一冊です。
推薦者(所属)	都 浩一 氏(神奈川県教育委員会教育局湘南三浦教育事務所)

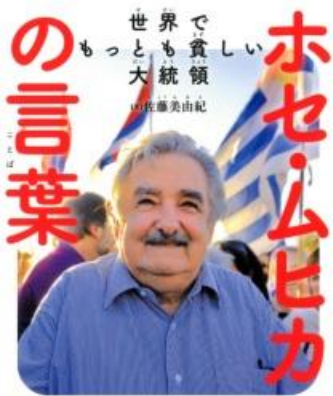
	『霧のむこうのふしぎな町』 柏葉 幸子／著 杉田 比呂美／絵 講談社
	小学6年生の夏休み。主人公のリナが、父のすすめで「霧の谷」へ一人旅に出かけるところから物語は始まります。 現実世界と異世界をつなぐのは、水玉模様で持ち手がピエロ形の「傘」。風に飛ばされた傘を追いかけるうちに、風変りな町にたどり着きます。 読み終わった後、長い旅から戻ってきた時のような、不思議な疲れと幸福感に満たされる、そんなファンタジー作品です。 スタジオジブリ制作のアニメーション映画「耳をすませば」の図書館のシーンにこの作品が登場すると共に、「千と千尋の神隠し」に影響を与えたとも言われています。 著者柏葉幸子さんの本業は薬剤師。この作品で、講談社児童文学新人賞(1974年)、日本児童文学者協会新人賞(1976年)を受賞しました。 「青い鳥文庫」にもなっているほか、クリストファー・ホルムズの訳により「講談社英語文庫」としても出版されています。図書館で、初版本と新装版、英語版を読み比べて、違いを楽しんでみてはいかがでしょうか。
推薦者(所属)	小菅 聡子 氏(神奈川県教育委員会教育局中教育事務所)

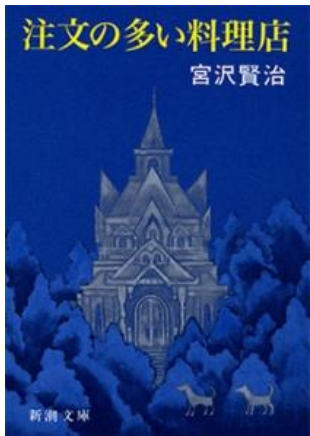
	『多賀城焼けた瓦の謎』 石森 愛彦／絵 工藤 雅樹／監修 文藝春秋 今みなさんがいる場所、そこが昔どのような場所であったのか、考えたことはありますか。そこにはどのような建物が建っていたのでしょうか。どのような人が、どのような思いで生活していたのでしょうか。 そしてそれは、どうしたらわかるのでしょうか。残されている文献を読む。たしかにそうですが、それだけではありません。ヒントは土の中にあります。この本では、土の中から発見された「焼けた瓦」から当時の様子を想像します。 場所は、宮城県の仙台平野。時は今から約1200年前。この地をめぐる多くの人が争いました。大きな国家に取り込まれることをきらい、自由に生きたいと願った人々と、道をつくり城をつくり、文字を使って一人ひとりを把握し、日本を一つの国にしようとした人々。 発掘調査から当時の人々の生き方が見えてくること、そして、多くのドラマの上に今の自分たちの生活があることを、考えさせてくれる一冊です。
推薦者(所属)	長山 武司 氏(神奈川県教育委員会教育局県西教育事務所)

平成28年度に書かれた推薦文

	『とんでもない』 鈴木 のりたけ／作 アリス館 表紙に描かれた、迫力のある、でも、あまりに人間くさいライオンの表情に目をうばわれてしまいます。ページをめくっていくと、愛らしい動物たちが、次から次へと登場してきます。彼らは、他の動物から、色々とうらやましがられています。でも、彼らは得意満面にはなりません。それどころか、彼らの表情は、どこか切なげです。それは、彼らには、他の動物には分からない苦労があるからです。 子どもでも大人でも、他の人をうらやましく思った経験はあるはず。でも、あなたがうらやむその人は、見えないところや知らないところで、人知れず苦労をしているのかもしれない。他の人に思いを寄せることの難しさに気づかされます。 「私のどんなところを他の人はうらやましいと思っているのだろう?」。そんなことを考えてみると、心が軽くなって、ありのままの自分をそのまま受け入れることができるようになります。 子どもも大人も、「素敵な本に出会えた。」と思える一冊です。
推薦者(所属)	福士 徹也 氏(神奈川県教育委員会教育局生涯学習課)

	『ともだちや』 作:内田 麟太郎 絵:降矢 なな 偕成社
	この本は「おれたち ともだち」シリーズの1つめの作品です。 キツネは ともだちやさんを はじめることをおもいつきました。 いちじかん ひやくえんで ともだちに なって あげるのです。 ちょうちん もって、 のぼりを たてて 「えー、 ともだちやです」 でも ともだちって うれるのかな？ かえるのかな？ 子どもたちは、新しい出会いがあると、友達になりたいと願い、関わろうと試みます。でも上手に仲良くなれないときもあるかもしれません。 子どもたちは、キツネを含めた登場人物が、自分なりの方法で友達をつくろうとする姿に、自分を重ねながら、読み進めることでしょう。 読み聞かせにもおすすめの一冊です。
推薦者(所属)	杉田 大樹 氏(神奈川県教育委員会教育局湘南三浦教育事務所)

	『世界でもっとも貧しい大統領 ホセ・ムヒカの言葉』 著：佐藤美由紀 双葉社ジュニア文庫
	「貧乏とは、欲が多すぎて満足できない人のことです。」と話したのは、ホセ・ムヒカさんです。彼は、2015年の3月まで、ウルグアイの大統領を務めていた人物です。この言葉は、ある記者に「いつも、貧乏な大統領と報道されて嫌になりませんか。」という質問の後に述べた言葉です。 私たちは、自分のほしいものが手に入ると幸せな気持ちになれる気がします。でも、それが手に入ると、もっと欲が出て新しいものが欲しくなってしまう。これこそが「貧乏な人」とムヒカさんは言います。 ムヒカさんは質素な生活をしている人たちが多数派と考え、大統領の時に限らず、政治を行っているときはいつもその多数派のことを考えながら行動しています。また、自らも質素な生活を送り、国民からも大きな支持を得ていました。 彼の人生も平坦なものではなく、家庭での苦労や国との戦いにも関わり、自分の信念と国のために尽力してきた人物であると強く感じました。 ムヒカさんが考えている平和な社会とは何なのか、この本を読むと共感する部分も多くあると思います。ぜひ読んでみて下さい。また、絵本も出版されているので、たくさんの人に読んでほしいと思います。
推薦者(所属)	佐伯 利彦 氏(神奈川県教育委員会教育局中教育事務所)

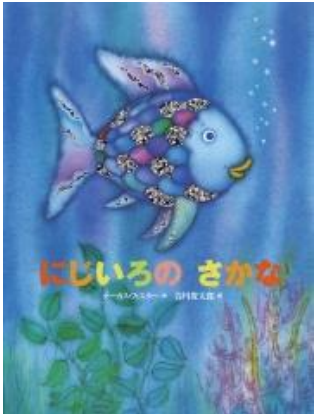
	『注文の多い料理店』 宮沢 賢治／著 新潮文庫刊
	『わたくしたちは、氷砂糖をほしいくらいもたないでも、きれいにすきとおった風をたべ、桃いろの美しい朝の日光をのむことができます。 またわたくしたちは、はたけや森の中で、ひどいぼろぼろのきものが、いちばんすばらしいびろうどや羅紗や、宝石いりのきものに、かわっているのをたびたび見ました。 わたくしは、そういうきれいなたべものやきものをすきです。 ～ 中略 ～ けれども、わたくしは、これらのちいさなものがたりの幾きれかが、おしまい、あなたのすきとおったほんとうのたべものになることを、どんなにねがうかわかりません。』 — 童話集「注文の多い料理店」の序より— 宮沢賢治の作品はとてもきれいで、ロマンチックであり、奥が深いと思いませんか。皆さんも宮沢賢治の作品に触れ、「すきとおったほんとうのたべもの」を探して見ませんか？
推薦者(所属)	星野 倫克 氏(神奈川県教育委員会教育局県西教育事務所)

平成27年度に書かれた推薦文

	『アバドのたのしい音楽会』 クラウディオ・アバド 文 パオロ・カルドニ 絵 石井 勇・末松多壽子 訳 評論社
	今でもはっきり覚えていることがある。ある日、魔法のような音にひかれて、居間にそっと近づいてみると、・・・なにか、ぼくにはわからない言葉でバイオリンに話しをさせているパパが見えた。それは、とても美しい言葉だった。 (本文から) 著者は、イタリア生まれの現代における最高の指揮者の一人であるクラウディオ・アバドです。 この本は、アバドの音楽との出会いからはじまり、自分の成長と音楽との関わり、オーケストラを中心とした西洋音楽やその楽器の紹介と、アバドの音楽の世界へどんどん引き込んでくれます。最後には、自分の指揮者としての心構え、自分の人生にとって音楽とは何か、そして、人は音楽とどう向き合っていくのか、アバドがやさしく語りかけます。 アバドを音楽の世界へと誘った曲は、何だったのか、その答えは本の中にあります。 音楽を志す子供たち、音楽に興味のある子供たちは、もちろんのこと、そうでない子供たちもきっと新たな関心をもってくれるであろうと思います。これから、子供たちを音楽会に連れていきたいと思っているお父さん、お母さんにも、是非、お読みいただきたい一冊。
推薦者(所属)	堀端 保聖 氏(神奈川県教育委員会教育局生涯学習課)

	『まあちゃんのながいかみ』 たかどのほうこ 作 福音館書店
	まあちゃんの髪は短いおかっぱです。長い髪が自慢のお友達に対抗して、まあちゃんは、「髪をもっとずーっと伸ばすよ」と言いました。「へえ、どれくらい？」と聞かれて、まあちゃんの想像の世界がどんどん広がっていきます。 長い、長ーいおさげに餌をつけて橋の上からお魚を釣ったり、長い、長ーい髪を海苔巻きみたいにぐるんぐるんに巻いてくるまって、ふかふか布団のかわりにして木の上で寝てみたり……。長い、長ーい左右のおさげをぴーんと張って木に結べば、洗濯物だって干せちゃいます。 この絵本を読むと、忘れかけていた子どもの頃の夢見る心を思い出します。また、カラフルな表紙は、長ーい髪をうずまき状にして寝転んでいるまあちゃんの絵で、うずまきの中には、お花が咲いていたり、たくさんの動物や虫がいたり、表紙を見ただけで楽しい気持ちになれます。 皆さんも、どんどん膨らむまあちゃんの素敵な空想の世界を味わってみませんか。また、親子で一緒に、まあちゃんの空想を広げていきながら読んでみるのもおすすめです。
推薦者(所属)	與那嶺 栞奈 氏(神奈川県教育委員会教育局生涯学習課)

	『ふたりはともだち』 アーノルド・ローベル 作 三木 卓 訳 文化出版局
	『ふたりはともだち』には、5つの物語が入っています。そのうちの1つ『おてがみ』を紹介します。 今まで一度も手紙をもらったことがない「がまくん」。「がまくん」の友だちの「かえるくん」はそのことを知り、「がまくん」に手紙を書くことを思いつき、大急ぎで家に帰って手紙を書きます。その手紙を途中で出会った「かたつむりくん」にあずけます。「がまくん」が初めて手紙をもらう姿を想像しながら、「かえるくん」はまた「がまくん」の家に戻ります。 『おてがみ』には、「かえるくん」の優しさ、「がまくん」の素直さ、「かたつむりくん」の頑張りがあり、読んでいてとても幸せな気持ちになります。挿絵に注目して読むと、1つ大きな発見がありました。『おてがみ』の中で「かえるくん」が着ている上着は、5つの物語の1つ『なくしたボタン』の中で「がまくん」が「かえるくん」にあげた上着だったのです。『おてがみ』がさらに好きになりました。 「がまくんかえるくん」シリーズは全部で4冊出ています。2人の心温まる物語をたくさん読んでみてください。
推薦者(所属)	永野 文 氏(神奈川県教育委員会教育局中教育事務所)

	『にじいろのさかな』 マーカス・フィスター 作 谷川 俊太郎 訳 講談社
	私が、息子や娘にキラキラしたにじいろの魚の絵を見せながら、読み聞かせをした思い出の一冊です。 キラキラとしたうろこが印象的な本の表紙。もしかしたら、本屋さんや図書館、学校などで見かけたことがある人も多いのではないのでしょうか。 主人公は、にじのように、様々な色合いの、青と緑と紫のうろこをもつ魚です。そのうろこの中には、きらきら輝く銀のうろこもあります。海の中を探しても、こんなきれいな魚はいません。他の魚たちは、彼を「にじうお」と呼びます。 誰もがうらやむ「にじうお」ですが、海の中で1番さみしい魚になってしまいます。困った「にじうお」は、かきこい「たこ」に相談します。すると、「きらきらしたうろこを1枚ずつ他の魚にあげるといい」と言われます。悩みながらも大切なうろこを1枚ずつ渡していくと…。 「しあわせ」について考えさせられる一冊です。
推薦者(所属)	高橋 壮芳 氏(神奈川県教育委員会教育局県西教育事務所)

平成26年度に書かれた推薦文

	『いつでも会える』 菊田まりこ 著 学研教育出版
	大好きなみきちゃんが急にいなくなった。 会いたい、会いたい。そして頭をなでて。 悲しみにくれるシロ。 でも…、目をつむると、考えると、いつでも会えるんだ。 あの時のまま。大好きなみきちゃんと。 大切な人を失ったときの悲しみや絶望、でも思い出はいつまでも心に残ることを、愛くるしい絵と言葉で表現した絵本です。 この絵本に「死」という言葉は出てきませんが、十字架の絵が、少女が亡くなったことを暗示させています。 この本がベストセラーになって、十数年経ちますが、思い出したように読み返すと、その時の自分のシチュエーションによって、受け止め方も異なります。 シロは今、どう思っているのでしょうか。みきちゃんはどうな気持ちなのでしょう。ぜひ、お子さんと一緒に読んでいただいて、感想を親子で話しあっていただきたい、短編絵本です。
推薦者(所属)	花田 忠雄 氏(神奈川県教育委員会教育局生涯学習課)

	『赤ヘル1975』 重松 清 著 講談社
	「赤ヘル」とは、赤いヘルメットを1975年より着用し、「赤ヘル旋風」、「赤ヘル軍団」など、その年のプロ野球・広島東洋カープの選手達の躍進を象徴するフレーズである。また、1975年は、広島に原爆が投下されてから30年。原爆や戦争によって深い傷を負った広島の人々が、1950年の球団創設以来、夢や希望を託し続けてきた、広島東洋カープ悲願の初優勝に大きく沸き立った年。 そんな広島に、この年の5月、東京から転校してきた主人公のマナブは、転校当初は「よそモン」と呼ばれ、厳しい洗礼を浴びることになる。しかし、広島の人たちの温かさにふれるにつれ、30年経ってもなお傷ついたままの広島の人々の内面に気づき、自分に何ができるかを、悩みながらも真剣に考え行動することで、友達や周りの人々との絆を強めていく。そんなマナブの成長していく様子に、この年、悲願に向かって大きく躍進していく実在の「赤ヘル戦士」たちの活躍を織り交ぜ、展開していく物語。 野球好きの人もそうでない人も、楽しみながら読め、一方で、平和についても深く考えるきっかけになるおススメの一冊です。
推薦者(所属)	藤沖 亮 氏(神奈川県教育委員会教育局生涯学習課)

	『トム・ソーヤーの冒険』(The Adventures of Tom Sawyer) マーク・トウェイン 著 大久保 康雄 訳 新潮文庫
	『トム・ソーヤーの冒険』(<i>The Adventures of Tom Sawyer</i>)は、1876年に発表されたアメリカの少年少女向けの冒険小説です。ミシシッピ川のほとりの小さな町に住む、少年トム・ソーヤーは勉強嫌いで、家の手伝いをさぼってばかりいます。腕白ですが、正義感の強いトムは、親友のハックルベリー・フィンをはじめとする仲間たちとともに、さまざまな冒険を繰り広げます。 この本をはじめて読んだのは子どもの頃のこと、あまりのおもしろさに一気に読みきってしまったことを覚えています。 この本の著者マーク・トウェインは、1835年にミズーリ州のフロリダで生まれたアメリカを代表する国民的作家です。この時代のアメリカは、まさに超大国となる土台を築いた時代でもありました。マーク・トウェインは、アメリカ西部の雄大な自然とともに、当時のアメリカ社会を、時に皮肉なメッセージを込めて描いています。トムたちが繰り広げる冒険の数々は、マーク・トウェインが少年時代に、自分自身あるいは友人の身に実際に起きた出来事であると言われています。マーク・トウェインは、いたずら好きで冒険好きですが、弱いものの味方で正義感の強いトムをいきいきと描いています。『トム・ソーヤーの冒険』は、単に冒険小説としてだけでなく、自由と夢が詰まった、いかにもこの時代のアメリカを象徴する文学作品なのです。日本の少年少女たちにはもちろんのこと、かつて少年少女だった大人たちにも読んでほしい作品です。
推薦者(所属)	河野 光志 氏(神奈川県教育委員会教育局湘南三浦教育事務所)

	『舟を編む』 三浦 しをん 著 光文社
	「言葉ってすごいな」そう思わせる1冊です。 辞書を作る編集部の話なんて退屈そうだなと思って読み始めたのですが、魅力的な登場人物と多くの視点で紡がれる物語は、胸躍る素晴らしいエンターテインメント作品でした。小説家が「言葉」や「本」という題材に正面から挑んで、こんなに素晴らしい作品を作ってしまうなんて、著者の勇気と力に感服してしまいます。 素晴らしい作品なので映画化もされていますが、「言葉のすごさ」を十分に味わえるのは小説版です。物語には「本作りにおける紙の大切さ」も描かれているので、ぜひハードカバーで読むことをおすすめします。ページをめくる作業自体がとても楽しいです。 普段出会わない言葉も出てくるので、辞書を引きながら読むとさらに楽しいです。「辞書は、言葉の海を渡る舟だ」そうです。さあ、辞書と小説を抱きしめて、言葉の海に漕ぎ出しましょう。
推薦者(所属)	太田 公仁 氏(神奈川県教育委員会教育局県央教育事務所)

	『ぎふちょう』 館野 鴻 著・絵 偕成社
	ギフチョウを見たことはありますか。ギフチョウは、早春に舞い飛ぶ美しい昆虫で、まるで春の小さな妖精のような姿を見せてくれます。その寿命は約1年で、そのうちの10か月は蛹として眠っています。 春にギフチョウに出会えること、それはひとつの奇跡かもしれません。林で産みつけられたたまごが、すべて順調に大きくなるわけではなく、まわりのたくさんの生きものが交錯する中、育っていくのです。 その様子を細密に、そしてさまざまな環境の中で、たくましく成長するギフチョウを温かく見守っているような感覚をもつことができる、そんな素敵な絵本を描いたのが館野鴻(たてのひろし)さんです。 館野さんは、1996年から神奈川県内に在住し、生物調査の傍ら本格的に生物画にかかわる仕事を始め、図鑑や児童書の生物画、解剖図プレートなどを手がけています。 絵本『ぎふちょう』の世界に入り込んで、ぜひ生きものたちのさまざまな営みを味わってください。
推薦者(所属)	露木 光人 氏(神奈川県教育委員会教育局県西教育事務所)

平成25年度に書かれた推薦文

	『宇宙からの帰還』 立花 隆 著 中公文庫
	宇宙の研究、宇宙開発など、宇宙に関する本は数多く出版されていますが、この本は異色です。宇宙飛行士が、その宇宙体験によって何を感じ、精神的にどう変わったのかを、宇宙飛行士本人へのインタビューを通じて明らかにしていくものです。 宇宙への飛行は時代の最高のテクノロジーなくしては成し得ないものであり、そのことに注目が集まることは当然ですが、考えてみれば、人類が宇宙に進出したことは、海に誕生した生物が陸に上がったこと以来の大事件です。 ましてや、人類という知性を備えた生命体がこの事件の主人公であり、そういう意味では地球始まって以来、初めての大事件です。そうであればこそ、その人間の心・精神の変化に光を当てたレポートが無かったことが不思議なくらいです。 興味深いのは、多くの宇宙飛行士が宇宙で神の存在を感じたという事実です。理系人間の最たる宇宙飛行士が、最先端の科学技術に支えられた状況に身を置きながら、宇宙空間の限りなく深い暗さや、青く輝く地球を見て、感じることによって、科学技術とは縁遠いと思われる心の内面に大きな変化をきたすことは、とても不思議なことです。宇宙の本というより、神とは、宗教とは、人の心とは、そして人間とは何かを考えさせられる、深い内容を含んだ本です。
推薦者(所属)	巴 靖章 氏(神奈川県教育委員会教育局生涯学習課)

	『いいじゃない いいんだよ 大人になりたい君へ』 水谷修・岩室紳也・小国綾子 著 講談社
	生・性…… どちらも大切なものということを本当の意味で実感できるようになったのは、最近のことかもしれません。 身近な人の死を体験することで、本当の生き方を考えるようになりました。今の子どもたちはバーチャルな死だけを体験し、生きることを考える機会がないのかもしれません。 性については、あまりにも子どもたちの性に対する意識の低さに、大人が教えるべきことを伝えていないと反省させられます。 この本は、水谷氏と岩室氏と小国氏の3人が若い時に体験してきたことがストレートに書かれています。興味はあるけど、聞きづらい話題も満載です。 この本をとおして、生きるとはどういうことなのか、本当の性とは何かを感じてもらいたい一冊です。
推薦者(所属)	窪田 晃子 氏(神奈川県教育委員会教育局県央教育事務所)

	『きみの友だち』 重松 清 著 新潮文庫
	あなたの「友だち」はだれですか。そんなありふれた質問を投げかけられたとき、まっ先に思い浮かぶのは、だれの顔ですか。いろいろな顔が思い浮かんだあなたにも、特別な一人を選んだあなたにも、苦い思い出とともに「友だち」という言葉をうまく受けとめられないあなたにも、「友だち」の存在を改めて考えさせてくれる本です。 「友だち」を失った女の子を軸に、どこにでもありそうな短い物語が、時間を行きつ戻りつしながら、見事につむがれていきます。ミステリー小説のようなあざやかな結末はなくとも、短編連作小説のおもしろさが極まっています。 年を重ねたあなたは、きっと昔の、ちょっと思い出したくない自分に出会えるでしょう。思春期まっさかりのあなたは登場人物に自分を重ねて、少し苦々しい気もちになるかもしれませんが、それでも「友だち」とつながることの大切さを教えてくれる一冊です。
推薦者(所属)	島田 健一郎 氏(神奈川県教育委員会教育局足柄上教育事務所)

	『にんげんだもの』 相田 みつを 著 文化出版局
	この本は、主に筆で書かれた詩の短編集である。 正直言って、あまり本を読まない私でも、この本に惹かれてしまった。その魅力はどこにあるのだろうか。 一番の魅力は、単純明瞭な文章である。日常にあることを題材に、素直な気持ちで、つぶやくように語りかけているので、とても分かりやすい。思わず、「確かにそうだ。」と頷いてしまうことも度々。また、「あのときの気持ちだ。」「こうありたいなあ。」などと考えたり、「自分は、このようにできていただろうか。」と問いただしたりすることもある。 別の魅力としては、個性的な字である。通常、本になるくらいなので、きれいな字で書かれたり、パソコンで入力されたりした字を想像しがちだが、そうではない。逆に、そうでないことにより、自分にとって身近な存在と感じ、本好きでなくても、あらゆる人が壁をもたずに、条件なく読めるのである。 最後に、この本を読み返すたびに、謙虚さ、素直な心、相手を思う気持ちが大切なんだと感じる。それが多くの人に読まれる理由ではないだろうか。
推薦者(所属)	簗 謙二 氏(神奈川県教育委員会教育局足柄下教育事務所)

平成 23 年度に書かれた推薦文

	『考えるヒント』 小林 秀雄 著 文春文庫 今でも、小林秀雄は、高校の教科書に載っているのだろうか。大層難しかったはずなのだが、どうもそこに魅かれたようで、以来、40 年近くの付き合いである。時折、読んだりながめたりしているが、こちらが一向に成長していないらしく、依然としてよく分からないままである。 ある日、県立図書館へ行って、「小林秀雄を分かるようになる何かいい本はありませんか」と聞いてみたことがある。司書の方が書庫から持ってきてくれたのは、大岡昇平の本で、「この人は、若い頃から小林秀雄の近くにいた人で、文章もずっと読みやすいから、こういうのを読んでみる方法もいいですよ」と、薦めてくれた。 その本を読んで、幾つか、納得したり思いあたったりしたことがあった。小林秀雄の作品には、カントだの、プラトンだの、哲学の話がよく出てくる。どうして小林秀雄は、こんなに難しいことばかり書くのかと思っていたが、彼の時代の旧制中学では、哲学を教えていて、彼も熱心に勉強していたらしい。もう一つ、大岡昇平は、小林秀雄の文章には詩的なところがあるとしていて、なるほど、高校生の私が惑わされた、あの“かっこよさ”は、“詩”的なものであったか。 そもそも、日本の知性の代表のようにも言われる人なのだから、その何十分の一の本も読まずに彼の本が分かるはずもない。だからこそ、小林秀雄という読書の達人の後を追いかけて、いろいろな本を読むことに挑戦してみることは、読書の一つの方法だろうし、たのしみだろうと思う。なにしろ、日本の古典からロシア文学、ゴッホからモーツァルトまで、ひろがっているのだから。 小林秀雄は、講演の名人とも言われている。少し早口の、しかし、落語の名人を聴くような、味のある語り口である。でも、最初は、是非、難解かもしれないが、その魅力的な文章にふれてみてほしい。 久しぶりに読み返して、「平家物語」がおもしろかった。今、NHKでやっている「平清盛」とは、随分と趣の異なった平家武者の姿にふれられると思う。
推薦者(所属)	福地 賢一 氏（神奈川県教育委員会教育局生涯学習課）

	『ないた赤おに』 浜田 廣介 著 いもと ようこ 絵 金の星社 「めでたし めでたし」で終わることの多い童話のなかで、赤おにが泣いて終わるという悲しい結末に、子どもの時は何か心残りを覚えて本を閉じたものでした。青おにの友情の物語で終わっていいのかな…。それ以来、様々に話の続きを考えました。赤おには、青おにの行方をさがしに行ってほしいな、そして前のように仲のよい友だちにもどってほしい。でも、人間には本当のことを言うのかな。本当のことを言ったら人間は赤おにと仲良くするだろうか。そうだ、人間に本当のことを言って、人間も一緒に青おにを迎えに行ったら、青おにも戻ってきてくれるかも。大人になって読み返しても、いろいろと思いが巡ります。ハッピーエンドって何だろう。
推薦者(所属)	安田 恵美子 氏（神奈川県教育委員会教育局生涯学習課）

	『海の都の物語』 ヴェネツィア共和国の一千年 塩野 七生 著 新潮文庫
	世界的な観光地となっている北イタリアの都市、ヴェネツィアは、かつて「アドリア海の女王」などと呼ばれ、地中海貿易や手工業で栄えた都市国家でした。この本は、ローマ帝国滅亡後、他国からの侵略と乱立する都市国家間の争いの中で、千年以上もの間、独立を守り、繁栄したヴェネツィア共和国の興亡の物語です。 世界には、「東洋のヴェネツィア」「小ヴェネツィア」と呼ばれる都市が沢山あります。しかし、それらの都市とヴェネツィアが決定的に異なるのは、ヴェネツィアが「水の都」ではなく「海の都」である、つまり都市の中に運河をつくったのではなく、海の中に都市を作ったということです。4世紀、最初に今のヴェネツィアに住んだ人々は、なぜ海の中に街をつくって住まなければならなかったのか。やがて地中海貿易で大きな繁栄を築くヴェネツィアとジェノヴァなど他のイタリア都市国家、あるいは、ビザンツやオスマントルコ、スペインなどとの争いの中で、この小さな共和国が、どうやって生き延びていったのか。十字軍やビザンツ帝国の滅亡、レパントの海戦等、日本人には、少し馴染みの薄い歴史上の出来事も鮮やかに描かれ、世界史への興味を持つきっかけになると思います。 文庫本で全6冊の大作ですが、一気に読むことができます。随所に作者の「国家観」やイタリアへの熱い思いもうかがえます。ただ、これは、あくまでも小説であるということを間違えないでください。この小説で世界史に興味を持ったなら、本格的な歴史書を読んでみてはいかがでしょうか。
推薦者(所属)	荻野 賢 氏 (神奈川県教育委員会教育局生涯学習課)

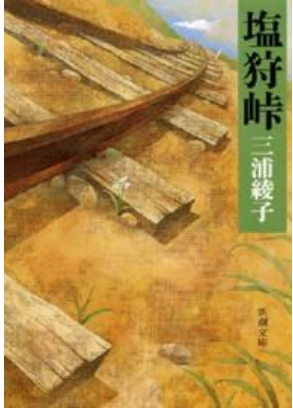
	『さぶ』 山本 周五郎 著 新潮文庫
	これは、江戸時代のお話です。何でも上手にできる元気のよい栄二と、何をやっても失敗ばかりのおとなしいさぶ。二人は同じ店に勤めるふすまや障子を作る職人です。対照的な二人ですが、お互いに自分にないところを認め合う親友です。 ところがある日、栄二に無実の罪が着せられます。お得意さんの家でなくなった高価なきれが、栄二の道具袋の中に入っていたのです。盗んでいないのですが、信じてもらえません。 やけになって町で暴れた栄二はつかまってしまい、何もしゃべろうとしないので人足寄場に送られます。 世の中が信じられなくなった栄二と、ひたすらに彼を信じ続けるさぶ。無実の罪の真相は何なのでしょう、栄二はこのまま心を開かないのでしょうか。 やがて、人足寄場での様々な立場の人との出会いが、栄二の心に少しずつ影響を与えていきます。どのように変わっていくのかを、実際に読んで確かめてみてほしいと思います。 登場人物の心の動きや、それぞれの人生が生き生きと描かれているところが、山本周五郎作品の魅力です。読み始めてみて難しいと感じた場合には、大人になってから、ぜひもう一度チャレンジしてみてください。
推薦者(所属)	西澤 一志 氏 (神奈川県教育委員会教育局生涯学習課)

	『ちゃんがり町』 山本 孝 著 岩崎書店
	思い切り遊びまわった小さいころのワクワクした気持ちがよみがえってくるお話です。機会があれば、ぜひ、子どもたちに読み聞かせてあげたい絵本の一冊です。会話は、関西弁なので練習が必要ですが、独特のイントネーションで読むところから、このお話の魅力が伝わっていくように思います。 駄菓子や、きもだめし、秘密基地から商店街へと豊かな自然と遊び場あふれる「ちゃんがり町」で、あばれ楽しむ子どもたちの様子に、心が躍らされます。
推薦者(所属)	廣瀬 修一 氏（神奈川県教育委員会教育局県央教育事務所）

	『君たちはどう生きるか』 吉野 源三郎 著 岩波文庫
	私の人生の大先輩に「中学生にお薦めの一冊、先生だったらどんな本を紹介しますか？」と尋ねると『君たちはどう生きるか』を読んでほしいなあ」という返事がありました。職場の同僚に「『吉野源三郎』って中学時代に読んだ？」と聞くと「コペル君でしょう？今も時々読むよ」との答えが返ってきました。 生徒のいない中学校の図書室で『君たちはどう生きるか』という題名の力強さに惹かれ、何度となく読んだ本。何年かぶりに読み返してみました。 主人公は中学2年生の本田潤一、あだ名はコペル君。コペル君の疑問におじさんが答える形で話は進みます。おじさんのノートには様々なことが書かれています。「ものの見方」「真実の経験」「人間の結びつき」…中学校の生活の中で起こる出来事を通してコペル君は考え、悩み、成長していきます。 今から75年も前に書かれた作品ですが、「いじめ」や「上級生とのトラブル」など現代の中学生にも通じるところが多くあります。難しい言葉もあるかもしれませんが、たまにはじっくりと本と向き合う時間を作ることも必要ではないでしょうか。 この本の結びの一文は「君たちはどう生きるか」です。この問いの答えは簡単には見つからないと思います。見つからないからこそ、考え、自分なりの答えを探してみてください。
推薦者(所属)	西田 孝予 氏（神奈川県教育委員会教育局足柄下教育事務所）

平成 22 年度に書かれた推薦文

	『小さい”つ”が消えた日』 ステファノ・フォン・ロー 著 ノトルステン・クロケンブリック 絵 本屋さんでふと見つけたのがこの本のかわいいイラストでした。しかし、次に疑問がわいてきました。小さい”つ”とはいったい何だろう。 本を開くとそれはすぐに分かりました。小さい”つ”とは「言った」「買った」などに使われる”つ”のことでした。その小さい”つ”が消えたら、「言った」が「板」に、「買った」が「肩」になってしまい意味が変わってしまいます。 この物語は、五十音村に住む文字の妖精たちの物語です。いばりんぼの”あ”、優柔不断な”か”、謙虚な”ん”など、さまざまな妖精たちが宴会で自慢話をしていると、誰かが、小さい”つ”は音がないから一番偉くないと言い出します。小さい”つ”は悲しくなり、家出をしてしまいます。小さい”つ”がいなくなり、文章が成り立たなくなって、世の中は大騒ぎです。妖精たちは自分たちが悪かったとみんなで協力して”つ”を探します。家出をした”つ”は旅の途中でさまざまな出会いをして、多くのことを学んで元気を取り戻していきます。 この世の中、必要でない人なんていません。みんなそれぞれの役割があり大切だとこの物語は教えてくれます。そして、読み終えた後、ホッとするような、温かい気持ちになります。 ぜひ、ご家庭や、学校でこの本を読んでもらえればと思います。
推薦者(所属)	中世 貴三 氏（神奈川県教育委員会教育局生涯学習課）

	『塩狩峠』 三浦 綾子 著 新潮文庫 主人公の永野信夫は、小学校時代のある約束をきちんと守ることによって、人生が大きく変わっていきます。人との出会いが劇的に人生を変えてしまったといってもよいでしょう。そして、人間関係、恋愛、宗教や性など人生に直面するであろう問題に悩み・戸惑う姿がそこに描き出されています。 三浦綾子の作品は、どの作品もそうであるように、人間の純真な心や醜い心、感情や欲望がストレートに表現されています。特にこの「塩狩峠」は秀逸であり、人間の存在意義そのものを考えさせられる小説です。物語の最後は、主人公信夫の乗った列車が、突然暴走を始めるのですが、その後の本人が取った行動が描かれています。私には、とても信じられない結末ですが…。 皆さんも人生ってなんだろうと考えたことがあると思います。私も考えたことはありますが、答えは出るものではありません。でも、この三浦綾子の作品は何かヒントを与えてくれると思います。ぜひ、読んでみてください。
推薦者(所属)	森 友良 氏（神奈川県教育委員会教育局生涯学習課）

	『であえて ほんとうに よかった』 宮西 達也 作・絵 ポプラ社 むかしむかし おおむかし。らんぼうもののティラノサウルスと泣き虫のスピノサウルスの子どもが海岸の波打ちぎわで出会うところから物語は始まります。「こんなところで おれに であって、さんねんだったな」(本文より)と、ティラノサウルスが大きな口をあけてスピノサウルスに近づいたとき、大きな地震がグラグラグラ。気がつくと、地面は二つに分かれ、小さな島となり、ふたりともとり残されてしまうのですが…。 人気絵本「ティラノサウルスシリーズ」第8弾のお話です。第1弾の「おまえ うまそうだな」は、2009年にアニメ映画化されています。この絵本の初版は2003年であり、子どもから大人まで、長く長く親しまれています。 この「であえて ほんとうに よかった」は、とてもおもしろく、おかしく、ちょっとかなしいお話です。相手のことを思うこと、そんなやさしさがたくさん詰まっているお話です。
推薦者(所属)	菴原 典子 氏 (神奈川県教育委員会教育局生涯学習課)

	『ごめんね ともだち』 内田 麟太郎 著 / 降矢 なな 絵 偕成社 キツネとオオカミの友情を描いた絵本「おれたち、ともだち」シリーズの一冊。オオカミは、キツネにダーツやけん玉でも負けてしまい、得意なトランプでも大負けしてしまいました。頭にきてしまったオオカミはキツネの椅子をけつとばして「いんちきは、このうちから でていけ！」とどなって土砂降りの雨の中、傘もかさずに家から追い出してしまいました。キツネも怒って帰っていきました。 負けた悔しさから、つい怒鳴ってしまったオオカミは後悔して謝ろうと思いますが、心の中では言える「ごめん」の一言がなかなか言えません。キツネもオオカミとまた遊びたいけれど、出会ってもそっぽを向いてしまいます。お互いに仲直りして遊びたい気持ちはあるのですが…。 遊びで負けた悔しさから素直になれない気持ち、「ごめん」の一言がなかなか言えない気持ち、仲直りしたいけど自分からなかなか切り出せない気持ち、何度も経験しているのではないのでしょうか。読んでいくと心が揺れ動き、読み終わった後にはホッとした気持ちになります。幼児から大人まで楽しめる一冊です。
推薦者(所属)	豊田 政治 氏 (神奈川県教育委員会教育局生涯学習課)

	『銀河鉄道の夜』 宮沢 賢治 著 新潮文庫 銀河鉄道は、宇宙を旅する。当たり前かもしれないが、その宇宙は空間だけでなく、時間的にも、精神的にも、無限大なのである。私たちは、ジョバンニの同乗者として、まさに「どこまでも行ける」切符を自分のものにすることができるのだ。さらに、人生のどこからでも銀河鉄道には乗ることができる。 まず、子ども切符を持って、初めての旅に出てみよう。ジョバンニが学校で感じた気恥ずかしさや、星々の写真を見てわくわくした心持ちも実感として受け取れる年頃に。汽車に乗ればもう夢の世界だ。星のきらめきもまぢかにあり、「風のように」走れる。科学的な話題もふんだんにあり、120 万年前のくまの化石を見たり、牛の先祖の化石を発掘する学者の話の聞いたりする楽しみもある。 青年期にさしかかって、地上の生活の重さを感じるようになり、精神的に高みを目指す旅はどんなものだろうか。車窓から二つの十字架が見える。白く光る北十字と、「あらゆる光でちりばめられた」サウザンクロスだ。サウザンクロスの駅で降りるのは、タイタニック号に乗っていた青年と子どもたちだ。十字架は天上への道しるべだろう。「女の子」の語る蝸の火のいわれも心に残る。 ところが、物語の旅は、一見天上に見える所では終わらないのである。大人の切符を手に、もう一度汽車に乗る。すると、ジョバンニがずっと抱えていた救い難いほどの孤独が改めて身に沁みるのだ。親友と共にいても、だからこそ感じる寂しさや辛さがある。「どこまでもどこまでも一緒に行こう。」と誓った友とも別れなければならない。ジョバンニが物語の中で汽車から降りるのは、サウザンクロスではなく、暗い「石炭袋」の前なのだ。私たちもその無限の闇を見つめて問いかける。「ほんとうの天上」はどこなのか。「みんなのほんとうのさいわい」は見つけられるのか。そして、旅はまだ続いていくのである。
推薦者(所属)	西部 志津 氏（神奈川県立図書館横浜駐在事務所）

	『あしたのねこ』 きむらゆういち 文 / エム ナマエ 絵 金の星社 「あした」ってどんな日なのだろう。 今夜寝て、次に起きたらあしたがやってくる。 当たりのことだけれど、それは、私が生まれるずっと前から続いていて、これからもずっとずっと続いていくこと。 捨てられて、兄弟の中で1匹だけもらい受ける人がいなかった、やせっぽちで体中の毛はぼそぼそで、ガマガエルみたいな鳴き声のねこ。誰にも相手にされず、雨にぬれ、どぶに落ちかけ死にかけける。 そんな時、だれかが自分を見ていたことに気づく。それだけで何だかうれしくなった。「あした」に向かってニヤアと泣いてみる。ガマガエルみたいな鳴き声でも自分の声を聞いて元気が出る。 「あらしのよるに」の作者きむらゆういちさんが文を、全盲の画家エムナマエさんが絵をかかれた子どもから大人まで読める絵本。 どうにもならないことは運命として受け入れて、その中の小さな幸せをみつめてみる。「あした」が来るのが、ちょっぴり楽しみになりそうだ。
推薦者(所属)	岩本 純子 氏（神奈川県立図書館横浜駐在事務所）

	『だから、あなたも生きぬいて』 大平 光代 著 講談社 弁護士の太平光代さんの半生を描いた自伝です。 波瀾万丈の人生伝としてではなく、人との出会いをきっかけに人生は変わっていき、転落するのも立ち直るのも最終的には本人の気持ちにかかっていることが伝わってきます。人生はいつでも立ち直れるということに気づかされます。 中学校の転校を機にひどい目にあい、そこから太平さんの転落人生が始まりました。 しかし、心のどこかで「悪者にはなりきれない」という気持ちが残っていたことと、転機となる人(のちの養父)との出会いを通して、感謝の気持ちや反省の気持ちを取り戻していき、最難関の試験である司法試験に合格します。 大平さんが、立ち直るきっかけとなった養父からの言葉。 「人生は訓練の場である。失敗もできる訓練の場である。あなたの未来は今この瞬間にある。」「道を誤ったのは、あなただけのせいやないと思う。周りも悪かったやろう。けどどな、立ち直らないのはあんたのせいやで。甘ったれるな。」 大平さんは、この言葉を聞いて過去と決別し、恨みや悔しさに向けていたエネルギーを資格試験突破へ注ぎ、挑戦を続けて、ついには司法試験に合格しました。 本文最後は、「あきらめたらあかん。今の苦しみは永遠に続かない。前向きに進んでほしい。」と大平さんからのエールでしめくられています。 今、悩んでいる人・苦しんでいる人の心の励みになる一冊です。
推薦者(所属)	川口 義和 氏 (神奈川県教育委員会教育局湘南三浦教育事務所)

	『カラフル』 森 絵都 著 / 文春文庫 友だちや他人とのつきあいの中で、裏切られたり、怒りを感じたり、何かに不安を感じたり、迷いを感じたり、「あの時、あんなことしなければよかった」「あんな言い方するんじゃないかった」などと後悔をしたりしたことはありませんか？ 自分が見たこと、聞いたこと、それによって感じたこと、考えたこと、行動したこと、それらはすべて真実だったのでしょうか？あるいは真実に基づいたことだったのでしょうか？ 「私は本当に裏切られたの？」「あの人は本当にいじわるをしたの？」真実を知るために、あなたならどうしますか？ 生前の過ちにより輪廻のサイクルから外されてしまった魂が、再び輪廻のサイクルに戻るために用意されたチャンスは、自らの手で命を絶った真(まこと)の体にホームステイをし、期間内に自分が犯した過ちについて思い出すというものでした。真は自分の家族、思いを寄せていた同級生に裏切られたと思い、自ら命を絶ちました。しかし真の体にホームステイしている魂が、真として生活を送っていく中で、家族や同級生の本当の思いを知ったとき、真を取り巻く世界は鮮やかな彩りを放ち始めます。それと同時に陽だまりの中にいるような暖かさを感じる、そんな話です。
推薦者(所属)	内田 源一郎 氏 (神奈川県教育委員会教育局湘南三浦教育事務所)

	『ねらわれた学園』 眉村 卓 著 ／緒方 剛志 講談社 校内の風紀が乱れる中、高見沢みちるが生徒会長になってから学校が変わり始める。圧倒的な力で生徒会を支配し、反对者を不思議な力で抑え、学校の風紀を取り締まるという名目でパトロール委員を新設し、学校を支配し始めた。彼女の強引なやり方に反感を持った主人公関耕二とその同級生は生徒会に戦いを挑む。 今から 30 年ほど前、中学生だった時、それまで「本を読まない」と言われていた私を変えてくれた作品の一つです。当時、この作家の作品を買いあさり、暇を見つけては読んでいました。その中でも、この作品は何度も映画化、テレビドラマ化されたものであり、当時、大変ポピュラーでした。 誰にでも親しみやすい公立中学校を舞台とする一方で、SFであることから、創造力をかき立てられると同時に、読み手が作品に引き込まれる優れた作品です。 執筆されてから 40 年近く経過している作品ですが、今読んでも新鮮さを感じることができます。この作品と共に『なぞの転校生』『まぼろしのペンフレンド』『ねじれた町』の3作品も、講談社により復刻されており、どれもおすすめです。
推薦者(所属)	下原 修 氏（神奈川県教育委員会教育局中教育事務所）

	『ちいさいおうち』 バージニア・リー・バートン 文・絵 ／石井 桃子 訳 岩波書店 静かな田舎に、ちいさいおうちがありました。おうちは、季節ごとに変わる自然の美しさや、太陽、月、星のめぐりをのんびりとながめています。時はたち、ちいさいおうちのまわりにあった景色は人々の手によって姿を変えていきます。 のんびり過ごしていた人々の様子も変わっていきます。 ちいさいおうちはその場所で、変わりゆく町をどんな気持ちで見つめていたでしょう。 そんな中、ある出来事が起こります。 この絵本を読むと、文明が進んだ現代において忘れがちな大切なものに気付かされます。 絵も素敵な作品です。
推薦者(所属)	古住 有美 氏（神奈川県教育委員会教育局中教育事務所）

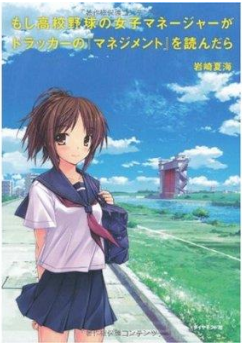
	『はてしない物語』 ミヒヤエル・エンデ 著 岩波書店 私は幼い頃、道端に咲く一つ一つの花には妖精が住んでいて、皆が寝静まった夜更けには、毎晩のように華やかな舞踏会が繰り広げられていると信じていました。そして、そんな想像力を高めてくれる数々の本は、私の大切な友だちでした。 その後も、読書の楽しみは色あせることなく、自分と向き合うための必要不可欠なものになっていますが、この本を初めて手にしたときは、本の装丁や文章の工夫に圧倒され、「こんなにおもしろい児童書には出会ったことがない」と感じるくらい夢中になりました。そして、何歳になっても、豊かな感受性と想像力は大切に育てていきたいと心から思ったものでした。 この物語は、読書好きの少年バスチアンが何気なく入った古本屋で「はてしない物語」という本を見つけるところから始まります。 崩壊しかけた王国を救うために、バスチアンはどんな冒険を体験するのか、そしてどんなことを学ぶのか、ぜひ読み味わって欲しいと思います。きっと誰もが、主人公になっているような錯覚を感じながら作品にのめり込めるはずです。 推薦者(所属) 奥脇 裕子 氏 (神奈川県教育委員会教育局県央教育事務所)
---	--

	『風が強く吹いている』 三浦 しをん 著 新潮文庫 陸上競技は孤独との戦いである、と何かの本で読んだことがあります。学生時代からずっと陸上競技を続けてきた私にとっては、孤独との戦いは、自分を強くするための大切な通過点でした。 この話の中に登場する学生たちも、走ることに魅せられ、走るという行為を通して、少しずつ自分自身を高めていきます。 今や正月のビッグイベントの一つとなっている「箱根駅伝」に出場するという大目標を掲げた、わずか10人という陸上競技部員。さまざまな課題と向き合いながら、さらに上を目指して走る者、初めて風を受けて走る醍醐味を味わった者、走ることに真剣に向き合ったことがない者…登場人物たちはみな個性的です。彼らは共同生活の中で、個性をぶつけ合い、一人ひとり、少しずつ変化を遂げていきます。その様子は、まさに人生そのものを表しているかのようです。 陸上というスポーツを通して、人生とは何か、を気付かせてくれるすばらしい一冊です。ぜひ、箱根駅伝を走るランナーになって、スピード感あふれる文章を堪能してみてください。 推薦者(所属) 大場 一子 氏 (神奈川県教育委員会教育局県央教育事務所)
---	--

	『夢をつかむイチロー262 のメッセージ』 「夢をつかむイチロー262 のメッセージ」編集委員会　ぴあ株式会社 「夢をつかむことというのは、一気ににはできません。ちいさなことをつみかさねることで、いつの日か、信じられないような力を出せるようになっていきます。」「そのことはまだ、目標というよりは夢ですが、これがだんだん近づいてくると、目標に変わってきます。」 日々の積み重ねの大切さを感じさせてくれる貴重な一言です。わたしたちは、つい結果やゴールばかりを追い求めてしまいます。しかしそれは、積み重ねの結果であり、その結果がいつかゴールにつながって行くことを262のメッセージは語っています。 いつも自分らしさを失わず、目標をしっかりつかみ、前に進む。簡単なことであるかのようで、とても難しいことです。悩み、くじけそうになったとき、それを乗り越えるヒントが、きっとこの本の中から見つかると思います。 元気になりたいとき、そっと心の中で読み返してほしい一冊です。きっとあなたの「夢をつかむ」ことにつながる一言が見つかるはずです。
推薦者(所属)	太田 正則 氏（神奈川県教育委員会教育局県央教育事務所）

	『くじけないで』 柴田 トヨ 著　飛鳥新社 この本は、90 歳を過ぎてから詩作に出会った柴田トヨさんの作品を集めた詩集です。産経新聞や下野新聞に掲載されたものを中心に 42 作品が収録されています。 子どもの頃の思い出や日常の何気ない出来事、時折訪ねてくる息子と過ごすひとときなど、読みながらその時の情景が思い浮かんで来るような飾らない自然な表現が魅力です。 また、DVDには、詩を朗読するトヨさん自身が収録されており、ゆっくりと一言一言を大切に語る語り口調に心が温まります。 98 歳になった今も詩作を生きがいに、元気に暮らしているそうです。「夢は、自分の詩集を世界中の人に読んでもらうこと」と語るトヨさん。皆さんも、前向きに生きるトヨさんの詩集から元気をもらってみてはいかがでしょうか。
推薦者(所属)	小畑 利幸 氏（神奈川県教育委員会教育局足柄上教育事務所）

	『おじいさんならできる』 フィービ・ギルマン 著・絵 / 芦田 ルリ 訳 福音館書店 ヨゼフが生まれたときにおじいちゃんが縫ってくれた素敵な青いジャケットは、おじいちゃんの手によって大変身！ジャケット、ベスト、その次は・・・最後には・・・「『おじいちゃんならきつとなんとかしてくれるよ。』『ふうむ、どれどれ？』はさみでちょきちょきちょき、はりでちくちくすーいすい。『ちょうどいいものができるぞ。』」汚れて小さくなっていくたびに繰り返されるこの言葉に期待感が高まります。 絵本の中には、床下に住むねずみの一家のもうひとつの物語も。隅から隅まで読む（見る）と、そこにも素敵な発見があります。 心からヨゼフを愛しているおじいちゃんと、おじいちゃんのこと大好きなヨゼフの心の交流に胸が温かくなり、物を大切にするって素敵だなという気持ちも芽生えさせてくれるそんな一冊です。 子どもも大人も、繰り返し読めば読むほどファンになること間違いなし。 「ほら、ぼくとおじいさんのこのすてきなおはなし！」
推薦者(所属)	布施 好美 氏（神奈川県教育委員会教育局足柄上教育事務所）

	『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら』 岩崎 夏海 著 ダイヤモンド社 この本は、中学3年生の野球部の息子たちが顧問の先生から薦められた一冊です。「高校野球のマネージャー」が「マネジメント」・・・？いったいどういうことでしょう。 高校野球といえば、『めざせ甲子園』。しかし、この物語にでてくる野球部は、監督も選手も覇気がなく、練習も結構いい加減にやっているから『甲子園』なんて言葉はだれも口にしなかった、いや、考えもしなかったのです。そんな野球部が、3年生最後の夏の都大会であれよあれよという間に勝ち進み、甲子園に手が届くところまでできてしまいます。なぜ、これほどまでに強くなっていったのでしょうか。 その訳は「マネジメント」にありました。野球とは無関係の「企業経営」について書かれた「マネジメント」という本で変わったのです。女子マネージャー「みなみ」が、経営学の父と呼ばれるドラッカーが書いた「マネジメント」を読み、それを次々に野球に応用していき、野球部はみるみるうちに強くなっていきました。 例えば、その本には「人は最大の資産である」「人の強みを発揮させる」と書いてあります。みなみはこれを野球に生かし、攻撃、守備、走塁の担当をそれぞれ最も得意な選手に任せました。また、試合にあって練習にない「競走、結果、責任」の3つの要素をふくむ「チーム制」の練習を取り入れ、みんなのモチベーションが高まっていたのです。 企業経営の「マネジメント」がこんなに高校野球に合うとは思いませんでした。いや、全てのスポーツに合うかもしれません。この物語は、スポーツが好きな方や経営学に興味のある方など、いろいろな方にお薦めの一冊です。
推薦者(所属)	北村 和裕 氏（神奈川県教育委員会教育局足柄下教育事務所）

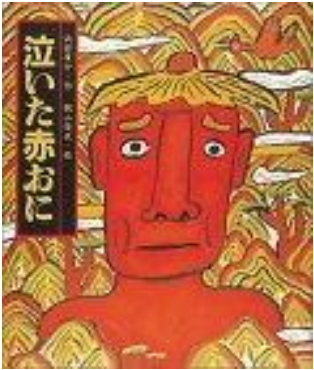
	『ハリー・ポッターと賢者の石』 J. K. ローリング 著者／松岡 佑子 訳者／ ダン・シュレスinger 表紙画 静山社 全7作の小説とその映画化で、世界中のファンを熱狂させた大人気シリーズです。 作品を読んだことのない人でも「ハリー・ポッター」という名前を聞いたことのある人は多いでしょう。いや、世界中でベストセラーの小説ですから、作品を読んだ人も大変多いと思いますし、映画を見た人も合わせると、この作品を知っている人の数は膨大なものになると思います。 本作はその記念すべき第1作目です。自分が魔法使いであり、魔法界では多くの人々に尊敬されていることを知らずにマグル(人間)の世界で不遇に育ってきた主人公ハリーが本当の自分の姿を知り、魔法学校ホグワーツに入学していきます。そこでロンやハーマイオニーなど多くの友達や尊敬すべき人と出会い、友情を育み、冒険をし、そして宿敵ヴォルデモートとの戦いを繰り広げます。 ハリーは様々な出会いと別れ、冒険を通じて強く成長していきます。どんな困難にも勇気と知恵を持って立ち向かい、乗り越えていくハリーとその仲間たちの友情が、読む人の心を引きつけて離しません。また、随所にちりばめられた謎や伏線が読み進めていくうちに少しずつ明かされていくストーリー展開は、一度読み始めたらやめられなくなってしまいます。 数々のゴーストやしゃべる肖像画などのユニークな登場人物、蛙チョコレートや透明マントなど、魔法の世界がユーモア一杯に描かれているのもこの作品の魅力です。 挿絵もほとんど無いにもかかわらず、多くの子どもが夢中になって読んでいるようで、この作品をきっかけに読書の楽しさを覚えた子どもも多いことでしょう。 子どもから大人まで、誰もが親しむことが出来る作品です。ぜひ、読んでみてください。
推薦者(所属)	高橋 大明 氏 (神奈川県教育委員会教育局足柄下教育事務所)

平成 21 年度までに書かれた推薦文

	『昆虫記』 ファーブル 著 /大岡 信 訳 河出書房新社 子供たちがまだ幼い頃、寝かしつけるときに、お話をせがまれました。「昔々あるところに…」と、何回か話しましたがすぐにネタが尽きてしまいました。そこで、本棚にある本を読むことにしたのですが、子どもたちには難しすぎたり、文の切れ目がわからなくなったりするのです。そんな中で大人気だったのがこの本でした。しかし、3人の子をいっしょに寝かしつけていたので、ある子は「もっと先を読め」と言うし、別の子は「昨日は先に眠ってしまったから、昨日のところをもう一度読め」と言うし、その日の分を読み始めるまでに毎日ひと悶着が起きました。 翻訳は朝日新聞の「折々のうた」を書いている方です。身近に見られる虫の話だけを選んで、親切な美しい言葉で書いてあります。自分の目で見て自分の頭で考えたことしか信用しないファーブルと大岡信の合作です。 最初はセミの話です。「セミが姿をあらわすのは、毎年夏至のころです。熱い太陽にやかれ、通りがかりの人々にふみかためられてかたくなった地面に、ぽっかりと親指が入るくらいの丸い穴があきます。この穴の奥からセミの幼虫は出てくるのです。」と始まります。その後は、コオロギ、カマキリとおなじみの虫の話が続いていきます。 ファーブルの書いた中身もさることながら、日本語のお手本としてもお薦めいたします。ただ、この本は現在品切れとなっていますので、岩波少年文庫の「ファーブル昆虫記」(大岡 信 編訳)もあわせて紹介します。内容はほぼ同じです。また、図書館等もご利用ください。
推薦者(所属)	富田 輝司 氏 (前神奈川県子ども読書活動推進会議委員)

	『海底二万里』 ジュール・ヴェルヌ 著 ／荒川 浩充 訳 東京創元社 私たちの国は、四方を海に囲まれています。その海は生命の源ではありますが、同時に、私たちに多くの恵みをもたらし、私たちの暮らしを支えています。また、古くから海は天とともに未知なるものとして、私たちの知的関心の対象となってきました。私も海のある街に育ちましたので、小さいときから海に親しんできました。海をテーマとした子供向けの本は多くありますが、私は、ジュール・ヴェルヌの「海底二万里」をお勧めします。 ネモ船長の潜水艦「ノーチラス号」の乗員の一人になって、世界の海をめぐり海底の様子やそこに棲む様々な生命に触れることができます。 今日、世界には、日本の「しんかい2000」をはじめとする多くの深海調査船があり、お話の世界が現実の世界になっていますが、この本が、多くの子供たちに科学する心、夢と想像力を与えてくれることに変わりはないと思います。
推薦者(所属)	金子 阜一 氏（元生涯学習文化財課長）

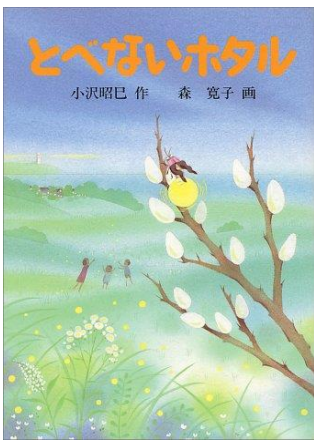
	『かいじゅうたちのいるところ』 モーリス・センダック 著 ／神宮 輝夫 訳 富山房 「昔読んだ絵本の中で何を覚えている？」と成人式を前にパーマをかけてきた息子に聞いた。「そうだな、いろいろあるけど、かいじゅうとぐりぐら、それから．．」結果は大体予想していた通りだった。そういえば、あのかいじゅうおどりのところで、「チャチャラカチャン」とメロディーを勝手につけて歌ったことを思い出した。そのあと「かいじゅうが笑っているあの顔が《きもかった》」という息子の言葉を初めて聞いて、あの表情がなんともいえず、いいなと思っていた自分には意外だったけれど、ハレの日を前に、さすがにお前のパーマの方が「きもい」とは言えなかった。隣の部屋から「あの足の方が気持ち悪かったわよ」という妻の声が聞こえた。
推薦者(所属)	中山耕造 氏（神奈川県子ども読書活動推進会議事務局）

	『泣いた赤鬼』 浜田 広介 著 偕成社 青おには、人間と仲良くなりたいという赤おにの願いをかなえてあげるために、悪者になっただけでなく、家を離れ長い旅に出てしまいます。 大切な友だちのために、自分ならどこまでしてあげられるのでしょうか。青おにのように友情のためにすべてを捨てることができるのでしょうか。 この物語に触れるたびに、友情の素晴らしさ・美しさを感じるとともに、二度と戻らないかも知れない旅に出た青おにの幸福を祈らずにいられません。 皆さんもこの物語を通して、友情について考えてみませんか。
推薦者(所属)	杉山繁雄 氏（厚木市立厚木小学校）

	『星の王子さま』 サン＝テグジュペリ 著 / 内藤 濯 訳 岩波書店 この本は、子ども向けのファンタジーとして楽しめる本でもあり、「おとなは、だれも、はじめは子どもだった。」と冒頭にあるように、子どもの心を忘れてしまった大人に向けた本でもあると思いますので、お子さんと一緒に保護者の方も読んで考えさせられるところがあるのではないのでしょうか？王子が訪れた小惑星で出会うのは、いずれも愚かさを風刺的に表現された大人たちであるし、子どもの心を持ち続けようとする「ぼく」も、王子の話を真剣に聞けなかったりします。いつになっても、子どもの頃の純真な心を忘れず、大切なものをしっかりと見据えていきたいですね。
推薦者(所属)	野崎裕司 氏（神奈川県子ども読書活動推進会議事務局）

	『はらぺこあおむし』 エリック・カール 著 / もり ひさし 訳 偕成社 思わず「じゃ～ん」 本を開いた瞬間から、カラフルですてきな色の世界が広がり、わくわくします。あおむし君が、いろいろなものを食べて、成長して、きれいな蝶になるまでのお話ですが、その食べていくものがさまざま。子どもの好きなお菓子や果物がたくさん出てきます。 食べた所には、虫食い穴のような穴も開いていますので、きっと子どもたちは、穴に指を入れて楽しむでしょう。でも、あおむし君がお腹をこわしてしまう場面では、「あおむし君、だいじょうぶ？」と心配する子も。自分とあおむし君を重ねあわせて読み進んでいくことでしょう。 そして、ラスト。大きい本いっぱい描かれたカラフルな色づかいには何度見ても圧倒されます。そのページをめくる時、きっとあなたは思わず「じゃ～ん」と言いたくなりますよ。 読んで楽しい。見て楽しい。穴が開いていてしかけがあって楽しい。いろいろ楽しめる1冊ですよ。
推薦者(所属)	及川圭介 氏（三浦市教育委員会）

	『密林 ― きれいなひょうの話』 工藤直子 著 ／ 和田 誠 絵 銀河社 猫のようなかわいい顔をしたひょうが主人公。はんてんが自慢のひょうは、ある日、目を覚ますとはんてんがないことに驚く。いえ 3 枚だけはあった。ひょうは森へはんてんを探しに出かける。 かえる、わにやまんとひひに会う。「ぼくのはんてん見なかった？」と尋ねるのに、ねだられて、残ったはんてんを一枚ずつやってしまう。 かわいそうに思ったまんとひひに教えられて、ちょうちょにはんてんになってもらう。気のいいひょうは、密林―きれいなひょうとなり、幸せいっぱいだ。心がぱっと明るくなる本で子どもたちも喜びます。
推薦者(所属)	塩練雪子 氏（読み聞かせグループ「すずの会」）

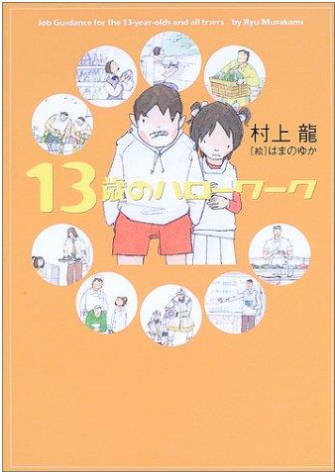
	『とべないホタル』 小沢 昭巳 著 ハート出版 西の空が夕日にそまって、町も田んぼも金色にかがやきだしたころ、ホタルの子どもたちが、いっせいにサナギからかえりました。その中に一匹だけみにくくちんだ羽を持つとべないホタルがいました。 仲間たちは、とべないホタルをばかにしたり、仲間はずれにしたりしませんでした。それどころか、皆とべないホタルのことを思っていたのです。それを知った、とべないホタルは大きな涙をこぼしました。 この話には、いじめ根絶へ向けての作者の願いが込められています。皆で支え合い共に生きることの尊さ、思いやりや優しさ、勇気を持つことのすばらしさを、子どもたちへそっと語りかけています。 「君たちは決して一人ぼっちではない。」というメッセージと共に、心いつぱいの感動を子どもたちへ伝えたい。
推薦者(所属)	佐藤正文 氏（高相津久井教育事務所 社会教育主事）

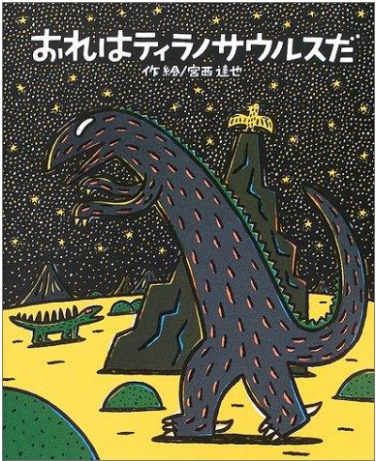
	『センス・オブ・ワンダー』 レイチェル・カーソン 著 ／ 上遠恵子 訳 新潮社 センス・オブ・ワンダー＝神秘さや不思議さに目を見はる感性。作者は、世界中の子どもたちに生涯消えることのないセンス・オブ・ワンダーを授けたいと願い、全編にその思いがちりばめられています。 「わたしは、子どもにとっても、どのように子どもを教育すべきか頭を悩ませている親にとっても、「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要ではないと固く信じています。」と語りかけます。「消化する能力がまだそなわっていない子どもに、事実をうのみにさせるよりも、むしろ子どもが知りたがるような道を切りひらいてやることのほうがどんなにたいせつであるかわかりません。」読み返し、かみしめるたびに重みを感じる一冊です。
推薦者(所属)	山本俊夫 氏（小田原市立下中小学校）

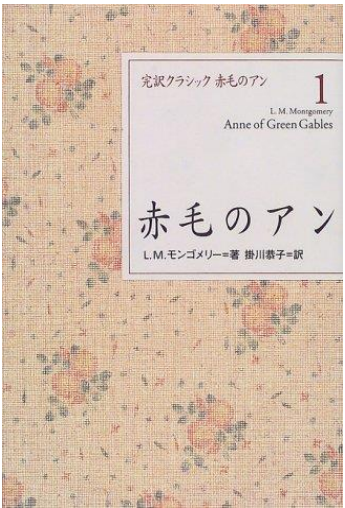
	『ハードル 2』 吉富多美・青木和雄 著 金の星社 いじめによる転落事故から主人公麗音が意識を取り戻し、ほっとして読み終えた前作。その麗音が再び意識を失う場面から始まる続編。怖くて読みたくない気持ちを奮い立たせ、「麗音がんばれ」と心の中で応援しながらページをめくる。現実はお話のように甘くはないということを知らされる物語。 こんな悲しいことは自分の身近に起きて欲しくないけれど、麗音の心の霧が少しずつ晴れるにしたがって、読んでいる自分の心から、重くどんよりした空気が消え、不思議と読む前よりすっきりと晴れやかな気分が広がる。ここに登場する子どもたちが、一步一步大人になっていく姿もすてきだけれど、凝り固まった大人たちが、この出来事をきっかけに軽やかに変わっていく姿が私の目にはとても魅力的に映った。 推薦者(所属) 渡井悦子 氏 (足柄下教育事務所 社会教育主事)
---	--

	『光とともに ～自閉症児を抱えて～』1巻～7巻 戸部けいこ 著 秋田書店 もともと、ミセス向けの月刊誌に連載されたコミックです。 テレビドラマ化されたので、ご覧になった方も多くいらっしゃると思います。 自閉症について最新の知見に基づいて、わかりやすく誠実に描かれているので、自閉症に対する前向きで正しい理解が得られることうけあいです。 親子でいっしょに主人公、光くんの成長を見守りませんか？ 推薦者(所属) 鈴木義邦 氏 (県生涯学習文化財課)
---	---

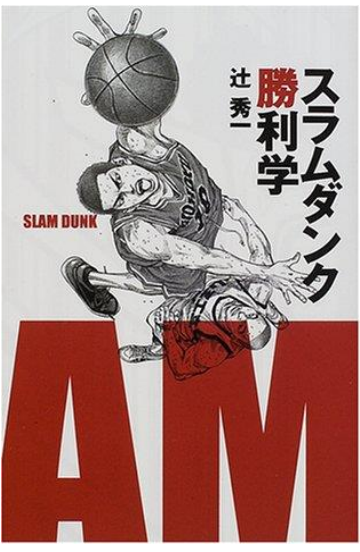
	『山古志村のマリと三匹の子犬』 桑原真二・大野一興 著 / ikko 絵 文藝春秋 『世の中におきるいろいろなことはたった二種類しかないそうです。ひとつは「どうにもならないこと」もうひとつは「どうにかなること」マリは、その二つについてわたしたちに教えてくれました。』(本文より) 2004年10月23日。マリは三匹の子犬を出産します。しかし、その日の夕方、大きな地震が村をおそい、一瞬にしてたくさんの家がつぶれてしまいます。おじいさんに生きる勇気をあたえ、そして、救い出されるまでの16日間、マリはだれもない荒れはてた土地で、生まれたばかりの子どもを守りぬきます。 命を大切にするという、あたりまえのことを忘れてしまっていないませんか？ そんなことをあらためて考えさせてくれる、感動の物語です。 推薦者(所属) 瀬瀬仁志 氏 (真鶴町教育委員会 生涯学習課)
---	--

	『13歳のハローワーク』 村上 龍 著 / はまの ゆか 絵 幻冬舎 子どもの頃、「将来の夢は」と聞かれ、たいへん困りました。運動が得意な子は、すんなりとスポーツの選手になる事をあげていましたが、私は運動が苦手だったので、何にするかずいぶんと悩んだことを覚えています。というのも、スポーツの選手以外の仕事についてはほとんどわからなかったからです。今考えると、将来の夢の具体的な姿がわかっていないのだから選べなかった事も無理はなかったのだと思います。 この「13歳のハローワーク」には、いろいろな「好き」を入り口に514種の職業が紹介されています。まず、紹介されている職業の多さに圧倒されました。そして、子どもの頃に戻った気分で、この本をながめてみると、なんだかわくわくしてきました。もしこの本が子どもの頃にあり出会っていたら、私の人生もきっと今と違ったものになっていたと思います。きっと、「将来の夢は」と聞かれた時に、胸を張って「〇〇になりたい。」と言っていたのではないのでしょうか。今も、時々ぱらぱらとめくりわくわく感を楽しんでいきます。
推薦者(所属)	飯塚亮人 氏（相模原市教育委員会）

	『おれはティラノサウルスだ』 宮西達也 著 ポプラ社 弱肉強食の恐竜の世界。恐竜の王者といわれる肉食のティラノサウルスが翼竜プテラノドンの子どもをねらっている。が、火山の噴火がおきてティラノサウルスがけがをしてしまう。「困っている人がいたら助けてあげるのよ。」という母の言葉から、プテラノドンの子どもが健気にティラノサウルスの看病をすることで2頭の心の中に友情が芽生えていく。 傷が癒えて仲良く友だちになれるかなと思いきや、悲しいかなやはり恐竜の世界。心は通じているのに友だちになれない。そんな切ない気持ちで胸がいっぱいになってしまいました。ティラノサウルスの表情の移り変わりを見るともらい泣きしそうです。 私たちの世界にもこんな経験した人がいることでしょう。友だちになりたくてもうまくなれない。でも、心が通い合えばきっと友だちになれるはず。そんなことを考えさせてくれた絵本です。 ティラノサウルスよ、元気を出してがんばれよ！
推薦者(所属)	清水 良 氏（愛甲教育事務所 社会教育主事）

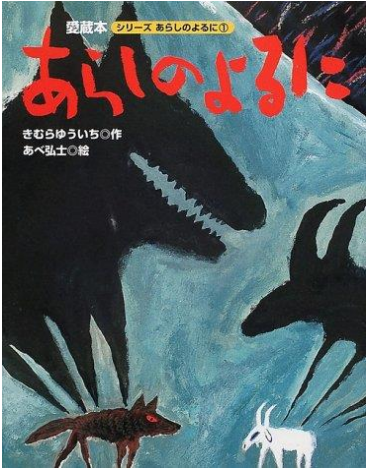
	『赤毛のアン』 ルーシー・モード・モンゴメリー 著 / 掛川 恭子 訳 講談社 “プリンスエドワード島”ーこの島へ行き、グリーンゲイブルスに住む素敵な少女アンと出会いたい。『赤毛のアン』を読んだ時、私はいつもそう思います。 孤児院で暮らしていたアンは、マシューとマリラに引き取られ、美しい自然にあふれるグリーンゲイブルスで成長していきます。アンのことをみっともないと言った年上の婦人に対して面と向かって非難したり、いちご水と間違えてワインを友達に3杯も飲ませて酔わせてしまったり、赤毛を染めようとして緑色の髪にしてしまったり…。アンは次から次へといろいろな事件を引き起こします。そういった事件を通して、アンは人々との心の交流を深め、成長していきます。 感性豊かで想像力に富むアン。チャーミングで愛らしいアン。赤毛でそばかすだらけのやせっぽちの少女アンのなんと魅力的なこと。そして、アンを優しく見守るマシューとマリラの兄妹もとても素敵です。『赤毛のアン』は、心が温かくなり、元気が出てくる物語で、私の大のお気に入りです。 皆さんもこの物語を読んだらきっとアンのファンになりますよ。
推薦者(所属)	高橋久美子 氏（高相津久井教育事務所 社会教育主事）

	『窓ぎわのトットちゃん』 黒柳徹子 著 講談社
	「おたくのお嬢さんがいると、クラス中の迷惑になります。よその学校にお連れください！」 小学校1年生にして学校を退学になったトットちゃん(黒柳徹子さん)が行くことになった新しい学校は…本当の電車が教室になっていて、座席が自由、授業の時間割はなく、好きな学科から自習形式で一人一人が取り組むという今までとはまるっきり違うタイプの学校…「トモエ学園」です。 第二次世界大戦が終わる少し前まで、実際に東京にあった小学校と、そこに本当に通っていた女の子(黒柳さん)のことを書いたこの本は、私が教育に携わるようになった今も時々読み返し、その度に新鮮な感動を与えてくれます。 好奇心に満ちあふれ、やりたいことがあるともうそれだけで頭がいっぱいで、とにかくやってみる、そんなトットちゃんとその仲間たち。そして、感性豊かな子どもたちをおおらかに見守り、遊びながら大切なことを学ばせてゆく大人たち。 子どもが読んでも大人が読んでも優しく元気になれるお薦めの一冊です。
推薦者(所属)	大谷京司 氏 (愛甲教育事務所社会教育主事)

	『スラムダンク勝利学』 辻 秀一 著 集英社インターナショナル
	スポーツに熱くうちこんでいる君へ…必見の1冊！ 指導者の教本として人気の著書ですが選手としても必見の価値があると思います。 『ただ、がんばるだけでは意味がない! 超ヒットバスケ漫画“スラムダンク”のなかに必勝の秘密があった。スポーツで勝つ、自分の人生に勝つ。スポーツも、人生も、ただがんばるだけでは意味がない。スポーツ心理ドクターが、漫画「スラムダンク」をテキストに、「勝つための心理学」を説く』『スポーツドクターとして子供からプロに至るまで様々な選手と係わりを持つ著者の辻秀一さんが、スポーツ心理学とご自身の考えを交えながら、「勝利学」として理論化』と紹介されています。 著書には ◇目標達成への鍵は「理解と覚悟だ」 ◇感情のコントロール ◇”すべき事”をする ◇”今”に生きる! ◇必ず自分に返ってくる ◇仲間の大切さ ◇心のつながり といった内容について説かれてあり、今まさに絶好調の君、壁にぶつかって悩んでいる君に元気、勇気、根気を与えてくれる1冊です！ なによりもスポーツだけでなく、今を生きる自分、これからの自分に生きる力を与えてくれる「心のミルク」のような気がします。
推薦者(所属)	日極 忠 氏 (県内在住 元中学校教師)

	『あなたの手のひら』 星野富弘 著 偕成社
	この本の作者の星野富弘さんは、24歳の時に事故で首の骨を損傷して、手や足が動かなくなっていました。しかし、2年半後、わずかに動く口に筆をくわえて文字を書き始めました。また、病室に飾られた花を描き始めました。その後、詩画や自分の気持ちを書いたエッセーや手記などの数多くの作品を発表しています。 この本には、四季の花の詩画63点と16編のエッセーがあります。季節を感じながら本をゆっくりと読み進めてみてください。新しい発見があるはずです。あなたも詩に込められている作者の気持ちを感じてみてはいかがでしょうか。私は、この本を読み終えた時、とても温かい気持ちになりました。
推薦者(所属)	塩川幸恵 氏 (中教育事務所 社会教育主事)

	『りんご』 スーザン・バーレイ 著 / 三木 卓 訳 かまくら春秋社 登山者が野原にすてたりんごのしんから、りんごの木が生まれました。 野原にひとり生まれたりんごの木は、動物たち(リス・小熊・きつね・ミミズ・モグラ・ねずみ)と友だちになり、やさしいお月様に見守られながら、風や雨に耐えて成長していきます。 秋になり、りんごの木は、感謝の気持ちを動物たちに届けます。 赤いりんごは、風に飛ばされて野原の動物たちに届くのです。 一本のりんごの木を通して、友達の友情・生きることの素晴らしさを語りかけてくれます。 心温まるストーリーとかわいい挿絵が、私たちをやさしい心にしてくれます。
推薦者(所属)	三宅美子 氏 (足柄上教育事務所 社会教育主事)

	『あらしのよるに』 木村裕一 著 講談社 ごうごうとたたきつけてきた。それは「あめ」というより、おそいかかるみずのつぶたちだ。この物語はこのような書き出しから始まる。あらしのよるにぐうぜんに、その二匹は出会ってしまった。ぜったいに会ってはいけない二匹であった。 お互いの正体がばれそうではいられない展開は、読む者をハラハラドキドキさせる。ひとたびお互いの正体が明らかになれば、その次に何が起こるかはだれにでも想像がつく。しかし、この二匹、アイとカブには友情とも思える心がかよい合う。 この物語はどうなるのだろうか、ぜったいにつづきが読みたくなる。 この物語のシリーズ最後では、「がんばれ メイ!」「がんばれ カブ!」とついついおうえんしたくなってしまう。ぜひシリーズで読んでほしい。
推薦者(所属)	下澤 豊 氏 (南足柄市立岡本小学校)

	『バッテリー』 あさのあつこ 著 教育画劇(単行本) 角川文庫(文庫本) 「バッテリー」その題のとおり、野球のピッチャーとキャッチャーのお話です。しかし、物語はこの二人の中学生のスポーツ根性ものではありませんでした。自分の好きな野球については、たとえ何があってもやり抜こうとするピッチャーと、そんなピッチャーを認め、自分もそれにふさわしくなろうとするキャッチャー。純粋に野球をやろうとする二人に、家族・勉強・友だち・先輩との関係、そして何より自分との葛藤が起こり、読む人の心を引きつけます。子ども向けの本ですが、実は大人も読め、私が中学生の時、こんな感情を持っていたらどうかと入り込んでしまう本です。私が全6巻ある中でまだ、3巻までしか読んでいませんが、最後まで目が離せない「バッテリー」です。スポーツに興味のない人でも、十分あじわえる本です。
推薦者(所属)	山中敏代 氏 (平塚市立豊田小学校)

	『葉っぱのフレディーいのちの旅ー』 レオ・バスカーリア 著 / みらいなな 訳 童話社 一年を通して日曜日ごとに年老いた父と一緒に家の周りを散歩しています。変わりゆく季節の中で目に映る景色を見るたびに、この絵本のお話が思い出されます。大きな木の太い枝に生まれた、葉っぱのフレディのお話です。春に生まれたフレディが、親友で物知りのダニエルから、いろいろなことを教わります。木の葉っぱであること、めぐりめぐる季節のこと、…。楽しい夏があつという間に過ぎて、秋が来て、緑色の葉っぱたちが一気に紅葉し、それぞれちがう色に色づいていきます。そして、冬。とうとう葉っぱが旅立つときがきます。ダニエルは、フレディに「いつかは死ぬさ。でも、“いのち”は永遠に生きているのだよ。」と語りかけます。フレディは、自分が生きてきた意味について考えます。「ねえ、ぼくは、生まれてきてよかったのだろうか。」この本を何度も読むたびに、本の言葉が心に響きます。「生きることはどういうことか」「死とは何か」を考えさせられます。小さい子どもから大人まですべての方にオススメの一冊です。そのときどきに親子で読み直し、“いのち”や自分の人生について考えるきっかけとなる絵本です。
推薦者(所属)	倉澤良一 氏（足柄下教育事務所 社会教育主事）